ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊～トキタンズ　～

咲良@葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊～トキタンズ　～

【Ｎコード】
Ｎ３９０２Ｔ

【作者名】
咲良@葉花

【あらすじ】
ファンフィクションだと思います。
ポケモン不思議のダンジョン　時の探検隊。
～記憶を亡くした少女と下っ端の少年の冒険の物語。～
ファンタジー、笑い、シリアス、恋愛。
止まる時と交差する想い。いつか、報われるなら…。

嵐、快晴、記憶喪失。（前書き）

今日は。見ていただき、光栄です。注意ですが…。
ファンフィクションですが、殆ど擬人化です。
「んなんポケモンちゃうわ！」という方は見ないほうが良いでしょう。
大丈夫な方はスクロールお願いいたします。

嵐、快晴、記憶喪失。

それは、嵐の夜だった。
＊「うおっ…だっ大丈夫か？」雷と何かが打ちつける。
＊「あと…少しだ、もう少し…。」
自分と誰かを繋ぎ止めるのは一つの鍵。
＊「！！！。」キケン、あぶない、そんな言葉が浮かぶ。
このままだとこの人まで…、この人まで巻き添いに…。
＊「お前ッ！＊＊＊！！」誰かが、私の名を叫んだ。
欠けてしまった鍵を片手に、嵐の海へと、落ちた。
〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次の日、空はすっきりと晴れ、青空が広々としていた。
…浜辺にひとり、倒れている少女。
＊「（…こ…ここは？…ッ駄目…意識が…。）」
再び、視界は黒に染まる。
心地よい風が、頬を撫でてゆく。

プロローグ　クリア。

嵐、快晴、記憶喪失。（後書き）

読んでいただき光栄です。
今回はポケモン擬人化、恋愛、シリアス…などを書きたかったので…。
不思議のダンジョンで泣いてしまった私。おお泣きしました。
では、また次回でお会いできれば光栄です。
次回は…パートナー登場です。それでは。

記憶喪失少女と浜辺少年。（前書き）

だい一話です。
パートナーが登場します。
浜辺で倒れる一人の少女。そのころ、ある少年は…。

記憶喪失少女と浜辺少年。

その頃、この町にある、ある建物(ギルド)では…
一人の少年がパシリとして使われていた。
＊「ハイッ！コレも運ぶッ！」　＊「え…えぇ～！？大きいよ！ボク持てないよ！」
＊「お前それでも男かい！ホラッ！さっさと運べ！」＊「うぅ…分かったよ…。」
本来なら、依頼などに出かけている筈だが…、（詳しくは本家を参照）
彼はまだ経験も浅く、パートナーも居ないため、外へはあまり出ず、パシリとして使われている。
＊「ねぇねぇ！そろそろご飯にしない？」＊「おなかがすいたのですか？」
＊「うん。」＊「さっき朝ごはん食べたばかりじゃｎ…」
＊「いいのー！おーなーかーすーいーたーー！！」
＊「はぁ…まぁ、そういうわけだ。適当に町で食べて来い。」
＊「わーい！ごーはーんー♪」　＊「さて、町へ行こうかな…。」

昼食を済ませた少年は、時間があるため、浜辺へと向かう。
＊「いつみても綺麗だよねぇ…。」景色に見とれる少年。
＊「…？あれ、何だろう。…！ひっ人！？」それが人だと分かり、急ぐ少年。
＊「君！大丈夫！？」倒れている少女が薄く、目を開く。
＊「……んぅ……。」
＊「ここに倒れてたけど…、何があったの？」　＊「…分からない。」
＊「名前は？」　＊「名前…。」“お前ッ！シークット！”誰かの

声がよみがえる。
シークット「シー…クット。」　チャマー（ポッチャマ）「ボクはチャマー。…で、何があったの？」　シークット「よく…思い出せない。」　チャマー「そっかぁ…。」
ふと、色々聞いているチャマーにある単語が浮かぶ。
“おたずね者”

チャマー「きっ君さ、もしかして、おたずね者とかじゃ…ないよね？」
シークット「オタズネモノ？それ、食べ物？」あまりにも間抜けな応答に安心するチャマー。
この子は、おたずね者とかじゃない。だろうな…。と確信した。
……でもこの子、どうする？
チャマー「うーーー…。」　そのときだった。？？？「ウ゛ーー…。」
突然何かに突進され、二人は派手に転ぶ。
チャマー「うわぁ…凶暴化動物（キメラ）だ！」シークット「キメラ？（食べ物じゃなさそう）」
そしてそのキメラと呼ばれた生物は、二人のバックを奪い、逃げた。
チャマー「あ！バック！！」　シークット「私のも！」
チャマー「追いかけよう！」　シークット「…うん！」

二人は、キメラと呼ばれた生物が逃げていった方向へと走っていった…。
後に、これが二人の最初の冒険となる。

第一話　クリア

記憶喪失少女と浜辺少年。（後書き）

はい！ありがとうございました！
パートナー登場です。本当はキメラはポケモンにしたかったのですが…、やっぱり辞めました。ポケモンが凶暴なんて、絶えられませんもの。
では、次回で会えることを願っております。
次回は、多分初バトル、シークットの力が明らかになります。
それでは。

持ち物泥棒と偽怪物（前書き）

こんにちは。
相変わらずの私です。文章力誰かください。
…というわけで、今回は…初バトル？あたりだと思います。
多分…。そこまでだとおもいます。
注意！　原作と結構違います。「！？展開違う！」などと思うと思いますが、ご了承ください＾＾＊では始まります。

持ち物泥棒と偽怪物

夢中で走っているうちに、二人は洞窟のようなところに迷い込んだ。
（海辺の洞窟…だと思います。詳しくは本家参照）
チャマー「…て、ここ、ダンジョンじゃないか！」
シークット「ダン・ジョン？人の名前？」そんなこと言ってる場合ではない。
チャマー「違うよ！森や洞窟、…つまり、さっきのキメラの住処なんだ。本当は危ないからギルドの人以外入っちゃいけないんだけど…。」

シークット「随分と詳しいのね。」　チャマー「え？あ、ボク一応ギルドの人間だから。」
シークット「…なら、安心なのね？」チャマー「いや、ボクまだ入ったことない…。」

一瞬、シークットの中には、…矛盾してる人ね…。などという言葉が浮かんでいた。
チャマー「いやぁ…ぼくまだ経験浅いし、パートナーがいないから…。」

言い訳の最中、シークットは奥から迫ってくる生物の気配に気が付いた。

シークット「…あの、あれも、キメラ？」指差した先には、獣のような、動物のような生き物。

チャマー「うん。そうだよ…って！に…っ逃げなきゃ！」真っ先に逃げ出す。

その後を追うようにして、駆けていく。
数分後…
チャマー「ゼェ…ゼェ…もう…無理…。」シークット「（もう限界…。）」
キメラ「ウ゛ー…。」　しかし、二人に休みなどなかった。
チャマー「まだ…、居るよ…。」　シークット「…数、増えてない…？」
チャマー「逃げ…ようか。」　シークット「うん…。」そのときだった。
シークット「…ッ！！」シークットの足に、電流が走った。要すろに、足を、つった。
シークット「チャマー？」　チャマー「どうしたの！早く！」
シークット「足、つった。」　チャマー「え！？ちょ…！何とかして歩けない？」
シークット「うん…。頑張ってみる。」手をついて、立ち上がろうとする。が、派手に転ぶ。
まるで、自分の足が、諦めろwと言っている様だった。
シークット「チャマー…、先、逃げて。」チャマー「そんな！出来ないよ…。」
そんな最終回のような会話とは、裏腹に、近づいてくる　キメラ。
キメラ「グルル…。」多分、翻訳すると、残さず食べてやるから感謝しな。みたいなものだろう。
食べられるのは嫌らしく、手を前に突き出して、拒否の意を表すシークット。
そのときだった。　チャマー×シークット「え？」なんと、そ

の手から、雷がでた。
その雷は、易々とキメラを襲い、キメラは倒れた。他のキメラも恐れをなして、逃げ出した。
“だらしねぇな。”　ふいに誰かの声がよみがえる。
シークット「ッ…。」　懐かしい声。だけど、思い出せない。そんな己を呪いながら、雷を発した自分の手を見る。シークット「何…これ…。」言葉では言い表せないようなものがあった。
時計とは少し違うような…、模様、だろうか、先に、17つの色の違う石のようなものがはめ込まれ、黄色の石が、少し、光っていた。
チャマー「あ！ボクたちのバックを奪ったやつだ！」シークット「！！！」
チャマー「追いかけよう！！」　シークット「…うん。」つった足も不思議と動く。
二人は、そのキメラが向かった方向へ走った。シークット「だいぶ奥まで…。」
チャマー「…！シークット、誰か居る。」シークット「…！」岩陰から覗く。
二人は、悪人面をした男と、キメラの姿を見た。＊「来た来た…。」
キメラ「グルル……。」次の瞬間、二人は歴史的瞬間を目撃する。
キメラ「ふぃ～…、盗って来ましたぜ。」

シークット×チャマー「キエエエエェェエエエ！！！シャベッタアアアアアァァァ！！！」
反射的に叫んでしまった。いや、叫ばざるを得なかった。キメラは普通喋らないからだ。

＊×偽キメラ（＊）「！！！」　シークット×チャマー「…あ。」
気づかれた。完璧に。＊「つけられてましたぜ？ガース？」ガースと呼ばれた男は、キメラのきぐるみをぬぎながら、ガース「つけら

れましたぜ？バール。」と悪人面の男が言う。
（解説です。ガース…ドガース、バール…ズバット。）
そこで、チャマーが恐怖に苛まれながらも、声を絞り出す。
チャマー「ぼ…ボク達のバックを返せ…。」震えながらで威圧感も何もない。つづいて、
シークット「えと、つきそい…てか、私のも返してくれると嬉しいな。（てか返せ。）」

バール「これは商売ですぜ？」　ガース「見られたら…返すわけには…なァ、バール？」
バール「なァ、ガース。」　チャマー「な、なんだよ！」
シークット「…つまり…、この人達を倒せばいいの？」
バール「その通りだお譲ちゃん。」　ガース「まぁ、それが出来れば…だがな。」

…で。

チャマー「シークット。」　シークット「う…ん？」
チャマー「そっちのガースってのを頼むよ。僕はコイツを倒す。」
シークット「（分担…ね。）分かった。」打ち合わせを済ませた二人は敵へと向かう。
ガース「誰から仕留めてやろうかねェ…。」シークット「えと、ガース…だっけ？」
ガース「イントネーションが違いますぜ。」
シークット「あ、そうね。えと…、ガース？んと、私が相手です。」
ガース「女ぁ！？弱っちそうじゃねェかい！」　バール「ガース、ソイツ素手でキメラ倒した野郎ですぜ？」　シークット「正確に言うと素手ではないけれど…。」
ガース「へェ～…そりゃあ、たのしそうじゃねェかい。」ニタァ…

と、悪人面が犯罪者に見える

＝＝＝バトル　　スタート＝＝＝

シークット「う…え！？」正直、バトルなどした事はあるが、それを忘れている為、分からない

相手は直感で毒だろう…と思った。手を刃に変形して迫ってくる。

多分、アレに触れたら、キケン…だろう。

ガース「お前…戦闘経験相当あるだろ。」そう思うのも無理もない。

シークット「おおお！？」などと、奇声を発しながらも、軽々しく避けているからだ。

手を、ガースに向ける。シークット「（確か…こう。）」

手首から再び光が出て、雷が放たれる。ガース「う〝おぉお！？」

その身体と顔からは想像も出来なかった凄まじい雷をなんとか避ける。

が、避けた先には、取っ組み合いになっている、チャマーとバールがいた。

チャマー×バール「ちょ。」シークット「（ごめん。チャマー。）」

ガース「あ。」

次の瞬間、けたたましい音とともに、チャマーとバールは戦闘不能になった。

シークット「（ごめんなさいごめんなさいごめんなさいｒｙ）」必死に許しを乞うシークット。

ガース「（ありえねェだろ…、こんな奴があんなの打てるなんて…。）」

暫くの沈黙、そして、また時が動き出す。

ガース「…（また飛んでくる前にしとめねェと…！）」渾身の爆風

を放つ。
シークット「（なんか飛んできたーーーッ！！）」爆音。これで勝負はついてしまったのか？
ガース「…雷はすごかったが…、まァ、所詮女だな。」シークット「へぇ。」
ガース「…！？」　雷をガースに打ち込む。
ものすごい音と共に、ガースが吹っ飛んだ。

シークット「…勝った…？」　周りを見渡し、倒れているチャマーに向かっていく。
チャマー「うぅ…ん。」　シークット「良かった…生きてた…。」
チャマー「勝負は…ついた…？」　シークット「勝ったよ…多分。」
チャマー「すごいじゃないか！一人で三人も倒せたなんて！」心の中で、シークットは、ずっとごめんなさい。とチャマーに言う。
二人は、バッグを取り返し、浜辺へと戻る。
チャマー「…で本当に驚いたよな～。シークットいきなり目の色と髪の色が微妙に変わったんだもん。」
シークット「え？」チャマー「もう戻ってるけど…。」なんだろう、と思いながらも、チャマーに感謝した。シークット「ところで…。」
チャマー「ん？」
シークット「戦闘中に針が刺さったみたいで…。」チャマー「え。」
シークット「左腕がしびれてるんだけど…どうしたらいいと思う？。」
チャマー「それ早く言ってよ…まぁ、とりあえず、それは、キケンだ。」
“キケン、あぶない”シークット「ッ！！！」ノイズ交じりの自分の声が聞こえた。
チャマー「とりあえず…ギルドで治療しなくちゃ…。」
＊「あ、ここにいたんだね♪探したよ～♪」誰かが、歩いてきた。

第二話　クリア

持ち物泥棒と偽怪物（後書き）

さて、最後に出てきた人物は誰でしょう！
分かりますよね（笑）。次回では、ギルドの人たちが多数登場です。
多分次の回でギルドに入門だと思います。
それでは、次回でお会いできることを祈って…、

自分の居場所。（前書き）

ともだち、ともだち～♪
どうもです。見ていただき光栄です＾＾＊
今回は、親方、子分達の一部が登場です。
多分今回でギルドに入ると思います。では、始まります。
注意！原作とかなり違います。&、多少のシリアス。

自分の居場所。

誰かが、歩いてきた。少年？随分と可愛らしい容姿だ。
チャマー「バルーン親方！」シークット「（親方？えっと、変装なのかな？）」
（解説：バルーン…プクリン）
バルーン「あれ？そっちの子は？新しい友達？ここら辺の子じゃないね～♪」
チャマー「丁度良かったー！」シークット「（え？親方って冗談かと…。）」
明らかに、親方、というかは…そこらの子供のような感じだ。
耳が生えているパーカーのような物。背は…意外とる青年（？）だ。
チャマー「実は…。」チャマーは腕に刺さっている棘の事を話した。
バルーン「え？で、針が？相手のタイプは？」
チャマー「攻撃的に…、毒だと思う。」バルーン「とりあえずギルドに運んで治療しよう。」
チャマー「分かった。シークット、ギルドはこっちだよ。」
着いたのは、随分と可愛らしい建物。（本家を参照したほうがいいかもです。）
＊「親方様、チャマーは見つかりましたか？」
バルーン「うん！あと、けが人が居るから入れるよ。」＊「！風を呼んできます！」
敬語を使っていた随分と可愛い衣装の青年は建物の中に小走りで入っていった。
梯子を降りた後、＊「おい、けが人、気をつけて降りて来いよ。」といった。
梯子に、恐る恐る手をかける。落ちる心配や、梯子は意外と丈夫だが、
シークット「（スカートの人は大変ね…。）」なんて思いながら降

りる。

地下にこんなに広い場所があるのは知らなかった。（本家参照）
風と呼ばれた少女が近づいてくる。風「この子ですか？」
（解説：風…チリーン）
バルーン「うん。新しい友達～♪」シークット「（いや、友達になった覚えは…）。」
風「とりあえず、針抜いちゃいます。毒が弱くて良かった…。」
といいながら、左腕の針を躊躇なくつまみ、抜いた。

シークット「痛ッ！！」風「ちょっと痛かったかな…、あとは…モモンの実（ぶつぶつ…。」
左腕に、変な薬を塗りこまれ、包帯ぐるぐる巻きになった。
風「一体何をしていたんですか？チャマーさんも傷が…。」この人の手当てが相当嫌いらしく、
チャマーは手当てを断りながら、チャマー「シークット、話しても平気？」
シークット「…うん。」　チャマーはシークットを見つけた所から、すべて話した。

風「！記憶喪失…。」　バルーン「そっかぁ…記憶かぁ～…。」一瞬、バルーンの目が変わった
風「でも…、すごいですね。キメラを一撃で…。」
＊「このギルドにもそういう人材ほしいんですけどねぇ～…。」
チャマー「…で、どこにも行く当てがないなら、パートナーとしてギルドに迎えたいな…って」

風「名案です！」バルーン「そうだね！新しいともだち～♪」

シークット「何騒いでるの？」　うたた寝していたようで、寝ぼけ

た感じのシークットが聞く。
チャマー「あ、えっとね…。」バルーン「行き場が無いなら、ボク達のギルドに入りなよ！」
シークット「へ…？」　チャマー「あ、えっとね？シークットは過去のこと覚えてないよね？」
シークット「うん。」チャマー「そうすると、お家とかも分からないでしょ？」

シークット「…そうね…。」　居場所…かぁ…。と心の中で呟くシークット。
バルーン「それでね、思い出すまで、この子のパートナーとして働いて欲しいんだよ。」
シークット「どんな仕事なの？」
チャマー「遺跡や洞窟、主にダンジョンの探検とか、困ってる人を助けたり、おたずね者を捕まえたり…。」直感で、この少年は冒険が好きなんだろう、と思った。
バルーン「最近はダンジョンもキメラも増えてきたからね…。」

数年前から、ここにも不可解な事件が起こるようになっていた。
キメラは増え…。　ダンジョンの増加…。　ポケモンの少数化…。
おたずね者の増加。　要因不明の事件、事故。
そして、時空のゆがみ。

とても、解決が難しいものばかり。各地のギルドも頭を抱えていた。
シークット「…私でいいの？」チャマー「勿論だよ！だって君強いし。」
シークット「そんなことないよ…。」　バルーン「武器無しでキメラ倒した時点で既にすごいよ～♪」

チャマー「君となら頑張れそうなんだ！頼むよ！」
↓　はい。
いいえ。
シークット「…いいよ。だって、チャマー助けてくれたもん。」
チャマー「本当！？」　シークット「（冒険していくうちに、私のことも分かるかもしれないし…。）」　バルーン「よし！じゃあ登録しよう！あとでボクの部屋に来て♪」

二人は、バルーン（親方）の部屋へと向かった。

バルーン「やぁ！　よく来たね♪じゃあ登録を始めよう！」
その童顔がさらに幼く見える。シークット「（何歳だろう…、あの人。）」
バルーン「じゃあまず…、チーム名を決めようか♪」

チャマー「うーん…。シークット、何かある？」考えるのがめんどくさいのかは知らないが、チャマーはシークットに話を振る。シークット「えーと…。」

時空…時…探検隊……！　何かを閃いたのか、シークットは口を開いた。

シークット「えと…、“トキタンズ”なんてのは…？」誰も納得はしないだろう。という確信だけはあった。　チャマー「いいじゃないかそれ！」
バルーン「じゃあトキタンズで登録だね♪とうろく♪とうろく♪たあーーーーーー！！」

空気が振動する。ひょっとしたら、地震でも起きたのではないか…
などと思った。
…で、コレで登録は終了したのだろうか？

バルーン「よし♪登録完了♪二人ともこれから頑張ってね！」終わったようだ。
バルーン「これは入門祝いだよ♪」

シークット「バックと、バッジと、スカーフ？」
バルーン「うん。それはトレジャーバック。とても便利だよ♪（本家参照）」
チャマー「そのバッジはいつも付けといてね。ここのギルドの人間の証なんだ。」

バルーン「で、そのスカーフはおまけ♪」
＊「いいんですか？あんな高価のものをあげてしまって…。」
水色の綺麗な色のスカーフ。しかし、見る角度により、いろんな色に見える代物だった。

チャマー「すごい！このスカーフ高い奴じゃないか！」
シークット「え…、貰っちゃ悪くないの？」
バルーン「いや、いいよ♪いつも入ってくる人間のタイプに合わせてスカーフはあげてきたし。」
＊「そういえば、新入りは何タイプなんですか？第一その虹色スカーフ（水色）はすべてのタイプにおけて効果をはｋｋ」バルーン「いーいーの！それにシークットは適合するタイプ多いよ？もしかしたら全部使えるんじゃない？」＊「それは普通のことじゃないですよ！大体なぜそのようなことが分かるのですか？」

バルーン「だって、シークット角度によって目とか色が変わるんだ

もん。」

シークット「え？」思わず自分の目を確認したくなる。そんなに自分は変わっているのか。

チャマー「確かに…、ボクはじめてみたとき、何タイプか分からなかったもん…。」

＊「たしかに…そうだな…。」シークット「タイプって、食べ物？」

チャマー「違うよ～♪」　バルーン「あはは♪ボクはセカイイチのほうが好きだな～♪」

＊「はぁ…、とりあえず、オマエ、バンダナ付けろ。」シークット「…うん。」

バンダナを付ける。

なんとなく、うっすらと、自分はここら辺の人間ではないことが分かっていた。

入門も終わり、太陽は沈み、夜になる。

まるで、世界のときが止まったような静寂が訪れる。

チャマー「部屋はここだね。」シークット「月がすごく見える。」

チャマー「ここは崖を掘って出来たところだからね～…。」ふあぁ、とチャマーは欠伸を漏らす

シークット「…（ここ、外に足場？庭？がある。）」

チャマー「じゃあボクもう寝るね～…、おやすみ、シークット。」

すぐに寝息を立て、深い眠りにつくチャマー。

シークットはバックの中を一度、見てみることにした。

ペンダント、日記のようなもの、欠けた鍵、開かない木箱。が入っていた。

シークット「（何か書いてあるかな…。）」日記のようなものを開いてみる。

海水で殆どにじんで読めない。

…日…（……。つ…に時空…渡…術……全…私の右手首…

……の……に…は…。全……。いつか……時……り……が……自…。

シークット「（ん、このページは読めるわ。）」

その力を忘れる前に。時空を……にはそれなりの代償がいる。

…を無くすおそれもあるらしい。私の右手首の……が刻んで…。

シークット「（やっぱり…ところどころが…。）」続きを読んでみる。

私は全ての属性が使える。次、属性の技とはちがう、魔術も使えるらしい。

魔術と属性の技の違いは……だから。

シークット「（属性の技？魔法？美味しいのかな…？）」

はらり、ページをめくったと同時に挟まっていたのか、羽が一枚落ちた。

シークット「（ん…、何だろう？）」その羽に触れた途端、激しい

頭痛と共に、何かの映像が頭の中に流れた。

“何してんだ？早く行くぞ。”　“足、つった。”　“だらしねぇな…”

“うわ…ちょ…”　“動けないんだろ？行くぞ。”

シークット「……ッ…。」　頭痛と映像から開放される。

今のはなんだろう、誰かと、誰かとの会話。誰？誰なの？

顔が見えない…、思い出せない。何なの…？この記憶。

知らずの間に、シークットは泣いていた。思い出せない自分に苛立ちと、情けなさを覚えたのだろう。暫く泣いた後。

シークット「……何してるんだろ、私。余計文字がかすむじゃない…。」

涙を拭って、窓越しに月を見る。シークット「（月…。）」

窓をあけ、月を見上げる。

初めてではない筈なのに、

どうして、こんなにも、初々しいのだろうか。

何処からか、草笛の音が聞こえた…、様な気がした。

シークット「（気のせいね…。さっさと寝よう…。）」　そして、深い眠りについた。

その頃、ある森では、一人の少年が草笛を吹いていた。

その目には、意志の火が灯っていた。＊「かならず…。時を取り戻

してみせる。」

第三話　クリア

自分の居場所。（後書き）

どうも、厨二な展開申し訳ございません。
さて、最後に出た人物は誰でしょう？大体予想はつきますね？
なんとなく、月という言葉が好きな私です。
多分ものすごく原作と違ってたと思います。
申し訳ございません。
では、次回でお会いできることを祈って…。
次回は目覚まし時計の代わりのあのお方、初依頼です。では、

初依頼　真珠探し。（前書き）

どうもです。
今回は、多分初依頼終了あたりまでです。
えと、全く原作と違うところもあります。
それもこれの特徴として受け止めてくれたら嬉しいです。
では、始まります。

初依頼　真珠探し。

朝、　　時が、流れ出す。日が、昇る。

時が止まっていたかのような静寂に、

と、ほぼ同時に。

＊「おうらあああぁぁぁ！！起きろおおおぉぉお！！」

誰かの巨大な声で目が覚める。

チャマー「うぅ…ドガールか…。」シークット「んぅ…。」

（解説：ドガール…ドゴーム）

ドガールと呼ばれた青年は、朝会が～～などと、怒鳴り散らし、どこかへと去った。

チャマー「…あ！朝会！！」シークット「朝会？」

チャマー「うん！行くよ！遅れちゃう！」シークット「わっ…ちょ！」

朝っぱらから、ギルドの廊下を走る。

朝会場（親方の部屋の前）

＊「遅ーーーーーい！！早く並べ！」

チャマー「ごめーん！！」シークット「（この人たちが先輩かぁ…。）」

急いで並ぶ。

＊「…で、あの子が…（ヒソヒソ。」風「そうなんですよ…（ヒソヒソ。」

シークット「（なんかヒソヒソされてるよぉ…。）」

＊「皆静かに！親方様のお話だよ！！」　シーン、と言うような静寂。

しかし、肝心の親方がしゃべらない。まさか、寝ていのではないか、と思わせるように。
バルーン「……。」再び、おしゃべりが始まる。
＊「ヘイヘイ…、またかよ親方ぁ…。」＊「これで新記録達成だな、グヘヘw」

バルーン「……ぐぅ。」寝ていた。いびきまでかいている目を開けたまま。
＊「（まずい…コイツらに悟らせないようにしなければ…）」

＊「親方様、親方様。」一生懸命だ。チャマー「いつもだよなぁ…。」
バルーン「……ハッ。」やっと、目が覚めたようだ。

バルーン「じゃあ今日は、新しい友達を紹介するよ♪」
＊「シークット、前へでろ。」うたた寝していたシークットは、シークット「ふぁ…、は、はい！」間抜けな返事をしながら前へとでる。

バルーン「この子はシークット、チャマーのパートナーとして働くよ♪ちなみに推薦入門、皆仲良くしてあげてね♪ともだち、ともだち～♪」
＊「簡単な自己紹介をしろ。（小声）」シークット「え。」
＊「早く。」シークット「はい…。」一気に視線が集中する。緊張のさなか。口を開く。

シークット「えぇ…と、シークットです。よろしくです。」簡単な自己紹介。
後に、掟を唱え、解散と言う流れになった。

チャマー「…何をすればいいのかな。」＊「おい、オマエら。」
シークット「はい。えぇっと、」＊「ラープだ。」
シークット「らぁぷ君。とらぁぷ様どっちですか。」
ラープ「君も様も要らない。ついでにイントネーションが違う！ラープだ！」

シークット「あれ、前にも誰かにイントネーションがｒｙって…。」
チャマー「…あ、あれね……（嫌な思い出だ…）。」
ラープ「はぁ…とりあえずオマエらには初依頼…初仕事をしてもらう。」

チャマー「本当！？」シークット「イライ…？（食べ物じゃないようね。）。」
ラープ「依頼は選んどいたぞ、落し物を探すだけのだがな。」一つの紙を渡される。
チャマー「えーとなになに…？　湿った岩場に大事な真珠を落としてしまいました。
誰か探してきてください。お礼はきちんとします。　ネーブ。」

ラープ「…というワケだ。頼んだぞ。」紙を封筒に入れる。
チャマー「よぉし！頑張るぞ！行こう、シークット！」
湿った岩場へと向かう。着いたら、数時間かけての探索。
結構きれいで、キメラが居ること意外は観光にでも使えそうなほどだった。
キメラとの対戦を避けたり倒しながら数時間…

チャマー「ふぅ…随分と奥まできたなぁ…。」疲労の色を見せているチャマー。
そして、おくの岩に光るものがあった。
シークット「あれかな？」チャマー「本当だ！！」

真珠を持ち、急いでギルドへと戻る。
ネーブ「本当にありがとうございました！これはお礼です！」
ネーブと言う依頼主はお礼と感謝の言葉を残し、去っていった。
チャマー「うわっ！２０００ｐもある！一気にお金持ちじゃないか！！」
シークット「そんなに大金なの？」チャマー「うん！すごいよ！」が、しかし。
ラープ「オマエら良くやったな、コレは預かっとく。」没収。
チャマー「えええぇ！？」ラープ「オマエらは…コレくらいかな？」２００ｐ手に入れた。チャマー「半分も無いじゃないかーー！！」
シークット「えっと…十分の一…ね。」
ラープ「黙れ！！これでオマエらの生活費もまかなってるんだぞ！！！」
壮絶な言い合い。その言い合いは風の
風「夕食ですよーーーーーーーー！」によって、終わりを告げた。
チャマー「ご飯だあぁぁぁ！！」一気に顔がはれ、駆けていく。
シークット「本当にころころ変わるなぁ…。」ま、それが長所なのかもね。などど思いながら、
夕食へと向かう。
全「いただきまーーーーす！！！！！」夕食が始まる。
ここのギルドの人たちは、食べっぷりが尋常じゃない。そんなことが分かったシークット。
そして、入浴の時間になる。
風「あ、シークットさん！！一緒に行きましょう！」シークット「…うん。」

＊「キャー！この子が新入りさん？？？？」妙にテンションの高い人。
風「あ、この人はキマリアです。ギルドの人ですよ。」
キマリア「よろしくですわ！えっと…シークット！」
シークット「よろしくね、…キマリアさん。」そのごすぐに打ち解ける三人。

浴場にて、
キマリア「流行…そうですわ！」どうやら、服の話をしているらしい。
キマリア「今度トレジャータウンで服でも見ましょうよ！」
風「そうですね！久々です！」シークット「いいの？」

キマリア「今から楽しみですわー！キャー！」
想いっきり、ガールズトークを楽しむ。楽しい入浴時間も終わり、部屋へと戻る。
シークット「（お話を沢山したのもこれが始めてねぇ…。）」
ふと、鏡をみる。そこには自分の顔が写る。

しかし、気になる点が一つ、頭のてっぺんにピヨっとしたのが一本。
シークット「…？なんか…変。」一生懸命に直そうとする、が、蘇る。シークット「とう！てい！たぁ！！」必死に間抜けな格闘をする。

そのとき、部屋のドアが開いた。
チャマー「…シークット？何してるの？」少し驚いた表情のチャマーが立っていた。
シークット「……なんでもないよ。（凹んでいる）」
その後、シークットたちは疲れていたのか、すぐに眠ってしまった。

夜が更ける。冷たい風が、通っていく。

第五話　クリア

初依頼　真珠探し。（後書き）

ふぃ～…。
あ、ネーブ…バネブー、ラープ…ペラップです。
あと、キマリア…キマワリです。
次回は…色々（笑）です。
では、次回でお会いできることを願って…

ギルドの休日（おまけw）（前書き）

注意！！今回の回は原作と関係なしです！
「ハア！？」と思うかもしれませんが、大目に見てください。
キマリア、風、シークットが今日は活躍（？）します。
では。始まります。

ギルドの休日（おまけw）

次の日、ギルドの休日がやってきた。
ギルドは　日曜日が休みだ。なので朝会もない。静かな朝を迎えた。
シークットはこの日を楽しみにしていた。街をキマリア、風と回るのである。
シークット「（いい朝…、昨日は急いでて見れなかったけど…綺麗…ね。）」
背伸びをしながら朝日を見つめる。

シークット「（何故かしら…？初めてではない筈なのに…こんなに新しい。）」
などと考えていると、ふぁ…と、チャマーも目が覚めたようだ。
チャマー「ん？シークット早いね…。」
シークット「ん、おはよう。」チャマー「おはよう…。」

ガターン。と言う音と共に、キマリアが部屋へと入ってきた。
キマリア「シークットー！行きますわよ！！」只今、約束の時間一時間前。
シークット「え？ちょ…準備が…。」チャマー「ん？何？お出かけ？」
風「ごめんなさい、キマリアが我慢し切れなくてきちゃいました（テヘッ。」
キマリア「あなたもでしょう！」てなワケで連れて行かれる。

トレジャータウンにて。

キマリア「ここがトレジャータウンですわ！」
活気のあふれる店がいくつもある。風「何でも売ってるんです。」

キマリア「で、思ったんだケド、あなたその服のままだと動きにくいでしょ？」
シークット「ふぇ？あ、そんなんではない…ケド。」
キマリア「ん、まぁとりあえず…シークットの服を選びますわよー！キャー！」

何故か盛り上がる風とキマリア。近くの洋服の店に入る。
＊「いらっしゃい！お、キマリア、新しい子かい？」
キマリア「えぇ、そうですのよ！これから服を選んであげますのよ！」
風「ニコニコ。」シークット「（…なんか嫌な予感しかしない。）」
店の奥の試着所ここで戦いは行われていた。

キマリア「よし！次はコレですわ！」
シークット「え…あの…。」キマリア「いいから！早く！！」
泣く泣く、露出度の高い服などを着る。
風「わぁ☆可愛いですよ～！！」
シークット「露出度高くて…。」キマリア「う～ん…じゃあこれは？」
シークット「なんか色々すごいですそれ。」
キマリア「う～～～ん…。」風「どういうのがお好みなのですか？」

シークット「…シンプルなのがいいです。それと、露出度低めで。」
キマリア「コレ？」シークット「よけい高いよ！それ！」

風「こんな感じでしょうか？」
出してきたのは膝下スカートの少し控えめな服。
シークット「…！それなんか好き！」キマリア「じゃあ試着ですわ！」
シークット「（ん、着やすい。）」

キマリア「可愛いじゃない！キャー！」
風「似合ってますよ！」キマリア「あとは、髪を少し伸ばしたほうがいいかもですわ！」

シークット「髪…。」肩の少しした辺りまで伸びている。
風「そうです！薬屋で買ってくれば！」キマリア「そうですわ！」
薬屋へ直行。髪の毛を伸ばす薬を手に入れた。ついでにさっきの服も買った。

風「ここのあたりは物価が安いからいいですよね～。」
キマリア「他のところは高くって…。」シークット「そうなの？」
髪に薬を付けてみる。
髪はなぜかすすっと伸びて、一気に腰のところまで伸びた。

シークット「すごい…！」キマリア「そうでしょう？さっきの薬屋はすごいところですのよ。」

色々とはなしながら過ごす。あっという間に時は過ぎ、夕方になる。
女子っぽい会話や、夕食の話をしながらギルドへ帰り、
夕食、入浴をすます。

シークット「（今日は楽しかったな…。）」
そんなことを思いながら、寝る準備をするシークット。
既に眠っているチャマーにおやすみ。と言うと、自分も眠りについた。

おまけ

の回１　クリア

ギルドの休日（おまけw）（後書き）

どうもですwなんか女子どうしって面白いw
こういうネタはちょくちょく入れていきます。
が、レズはないですよ！次回は本編に戻ります。では！

おたずね者と不思議な夢（？）（前書き）

やっと時空の叫びネタです！
ここ辺りから、書きたいことが沢山あって困ります（笑）
では、はじまります。

おたずね者と不思議な夢（？）

次の日…。

ドガール「うおらぁぁああ！起きろおおぉ！！」

チャマー「おはよう…シークット。」シークット「おはよう…。」
朝会に向かう。朝会も無事に終わる。
ラープ「では、解散～！」

ラープ「あ、オマエら、ちょっと来い。」
チャマー「うん？」　シークット「はい。」

ラープ「今日もお前らには依頼をこなしてもらう。が、今日は少し違うのをやってもらうからな。」
と、言いながら、依頼掲示板のほうへと向かう。
チャマー「前のが貼ってあった場所とちがうね。」
シークット「人の写真…？」チャマー「わ～…なんか皆かっこい…。」
ラープ「そいつらはおたずね者だ。」チャマー「えぇっっ！！」
シークット「これが？食べ物じゃなかったのね。」
ラープ「オマエなぁ…（親方様と発想が似てる…。）」

チャマー「…で、これを、どうしろと言うの…？」

ラープ「モチロン、倒してくるに決まってるだろ。」
チャマー「えええぇ！！怖いよ～～～！！」嫌そうな顔をするチャマーに対し、
シークット「（うわぁ…悪人面してるなぁ…）」顔を感想をぶつく

さ言うシークット。
ラープ「まぁ、トレジャータウンとかで準備を整えれば怖くないだろ？」

チャマー「…そ、そうだね…。」
ラープ「まぁ、街はいったことあるだろうが…、道具の店とかは…丁度いい、あいつに案内させよう。」
シークット「あいつ？」ラープ「食べ物じゃないぞ。ちょっと待ってろ。」

ラープは少しどこかへと行った。その後、誰かを連れて戻ってきた。

ラープ「あぁ、コイツらだ。よろしく頼む。」＊「えぇ、分かりましたでゲス。」
口癖の変な少年だ。

チャマー「あ、ベル！」ベル、と言うらしい。
（ベル：ビッパ。）
ベル「あ、チャマーじゃないでゲスか！えっと、そっちが新入りのシークットでゲスか？」
シークット「はい。」

ベル「宜しくでゲス！ベルと言うでゲス。」随分と男の割りに可愛い顔をしている。
シークット「よろしく。」

そんなこんなで…街に出る。

ベル「ここが一番品揃えがいいところでゲスよ！カオン商店、クレ

ン専門店でゲス。」
カクレオンをかたどった店がある。店員が二人。似たような見た目をしている。

ベル「…で、アレが〜〜で、コレが〜〜でゲスよ。」
少しの見学と説明。

ベル「じゃあ準備がおわったら広間に来るでゲス。」
買い物に出かける。
チャマー「じゃあさ、カオン商店あたりに行ってみようよ！！」
シークット「そうね…。」

店の前、二人の少年と店員が話している。

店員「偉いねぇ〜。」＊「いえいえ、お母さんの分も頑張らないと。」
＊「カオンさん、りんご一個多いよ??」
店員「あぁ、それはサービス♪」＊「いいんですか！?」
店員2「生活が大変なんだろ？頑張ってくれよ♪」

＊「有難うございます！」何かほのぼのな会話をしている。
＊「ありがとうございました…キャ！」すってん。と小さいほうの少年が転ぶ。
さっき買ったと思われるりんごがシークットの足元に転がってきた。

シークット「ん。（渡さないと、）はい。」
＊「ありがとうです！」りんごを受け取る小さい少年。
手が、ふれた。そのときだった。

シークット「（…！何…これ…。）」

頭に電流が走ったかのような頭痛に襲われた後、何かが聞こえた。

“誰か、助けて！！！”

確か、目の前の少年のこえ…。に似ている。

シークット「今のは…君が…？」＊「…ん？」

シークット「…なんでもないよ、お兄ちゃんが待ってるんじゃない？」

＊「あ、そうだ！」＊「リリ～！行くよ！」」

リリ「うん！宝物早く見つけようね！お兄ちゃん。」

少年たちはその場を立ち去った。

店員「偉いよね～…家事とかもおにいちゃんがやってるんだって…。」

チャマー「へぇ…。」店員「なんでも最近は弟の方が宝物を失くした…とかで探してるんだってさ。」

チャマー「そうなんだ…。」店員「あ、なんか買ってくかい？」

シークット「何があるの？」

店員「色々あるよ！じっくり見て行ってね！」と、気前のいい店員。

結局、結構買い込んで広場に向かう。すると…。

＊「本当ですか！？」　？「あぁ、それならこの前見たよ。」

リリ「おじさん本当！？」何があったのだろう。

チャマー「あ、さっきの。」

＊「あ、さっきは弟がお世話になりました！」

シークット「いえいえ…。何かいいことでもあったの？」
＊「実は失くし物を見た、と言う人が居たので…。」
？「はい。トゲトゲ山にありましたよ。」リリ「そんなところにあったんだ…。」
＊「何時の間に…。」　？「案内しましょうか？」
＊「有難うございます！お願いします！」リリ「わーい！」
少年たちと青年？が立ち去るとき、青年？と肩がぶつかった。
？「おっと…失礼、失礼。」シークット「いえ。」
また、そのときだった。
　電流が走るような頭痛。その後に、ある映像が見えた。
それは、さっきの青年？とリリという少年が山の奥のようなところにいる映像だ。
リリと言う少年が叫ぶ。

“だれか、たすけて！！！”

シークット「ッ…！！」チャマー「ん？どうしたの？シークット。」
今見た内容をチャマーに告げる。
チャマー「え？さっきの子が！？……でも、あの人やさしそうな顔してたしなぁ…。」
シークット「……。」チャマー「疲れてるんじゃないかな…、ここの環境とかで。」
シークット「……そうね。」
しかし、不安は抜けきらなかった。その足で、広場へ向かい、ギル

ドでどのおたずね者を
倒すかを決める。

ベル「う〜〜ん…。」チャマー「どうしよう…。」シークット「…。」
そのとき、けたたましい警告音が鳴り響いた。
ベル「あ、張替えでゲスね。」チャマー「張替え？」

ベル「うん。新しい依頼の貼り付けや終わった依頼をはがしたりするんでゲスよ。」

ばたん。とおたずね者けいじばんがひっくり返る。いや、反対になる。
そして、暫くして、ばたん。と元に戻る。

ベル「お、結構変わったでゲスね…。ん？チャマー、寒いでゲスか？」
チャマー「ううん…。シークット、あれ、見てよ。」
チャマーの指差した先には、さっきの青年？の顔がかいてあるポスター。

“誘拐、恐喝等ニヨリ指名手配。スグレム”

シークット「…！！！リリたちが…危ない！」
ベル「どうしたでゲスか！？」チャマー「ベル、この依頼にするよ。」
シークット「じゃあ、いってきます！」
ベル「…やけに気合が入ってるでゲスなあ…。」

トゲトゲ山、入り口。

チャマー「…！さっきの子…！」
＊「…あ、さっきの！弟が！」
シークット「……やっぱり…。」
説明を聞くと、三人でこの山に入る直前、催眠術をかけられ、気がついたらここにいた。
ダンジョンは危ないので、どうしようか迷っていた…所だったらしい。
＊「ボクが非力だから…もっと強ければ助けられたのに…。」
泣き出す少年。
チャマー「…大丈夫。ボクたちがリリを助けるよ。」
＊「でも…ダンジョンは危ないって…。ギルドの人以外入っちゃいけないって…。」

チャマー「うん。ボクたちはギルドの人間だよ。おたずね者のポスターを見て飛んで来たんだ。」
＊「…！ほんとうですか！？弟を助けてくれるんですか！？」
シークット「うん。大丈夫。きっと助ける。」
チャマー「あ、そういえば名前聞いてなかったね。」
＊「リルです。」チャマー「ボクたちはチームトキタンズ。ボクはチャマーで。」
シークット「…シークット。」

チャマー「よし、依頼開始だね！」
トゲトゲ山へと二人は入っていった…。

リル「…リリ。」

第六話　クリア

おたずね者と不思議な夢（？）（後書き）

どうも。シリアスはまあまあ平気ですが、
恋愛が書けないという欠陥があります。
近々、キャラ紹介らへんをしようと思います。

トゲトゲ山（前書き）

わー…多分二回目の戦闘シーン入るかもです。
文章力がほしいです（笑）
では、

トゲトゲ山

チャマー「…うわぁ…、トゲトゲしてるね…。」
岩肌が随分とトゲトゲしている。触れたら、一気に傷になりかねない。

シークット「岩肌に注意ね。」チャマー「うん。」

そして、キメラに遭遇しながら、なんとか中腹。
シークット「此処のキメラは飛ぶのね。」
チャマー「うん。やつらの特性は風か鋼か岩だからね。」

シークット「属性ってどうすれば分かるの??」
チャマー「うーん…目の色?そういえばシークット。」

シークット「ん?」チャマー「全属性使えるのって本当?」
シークット「多分。」　チャマー「はぁ…いいなぁ…。」
シークット「私よりも凄い人は沢山居るよ。」

後に、この能力のおかげで、ギルドを次々と巻き込むこととなる。

チャマー「いや、全属性使えるのは君しか居ないよ。（本当に謙虚だよなぁ…。）」
シークット「ん〜?……そうなんだ…。（…私だけ…?だと嫌だな…。）」

手首を確認する。多分いろが属性を表すのだろう。
今は黄色。電気のようだ。

最深部。

リリ「あれ？お兄ちゃんは？」　スグレム「あぁ、すぐに来る。」
リリ「落し物は何処？？」　スグレム「あれか？あれは、嘘だ。」

リリ「え…。」一気に目に浮かんでいたワクワクが不安に変わる。

スグレム「大丈夫。言うことを聞いてくれれば怪我はさせない。」
リリ「お…兄ちゃん…。」リリに近いづいてくるスグレム。

スグレム「そこの穴に宝があると噂があるんだ。そこに入ってとってこい。」
リリ「……ヒック……おにいちゃ…。」泣き出すリリ。苛立つスグレム。

スグレム「言うことを聞け！」　リリ「“誰か、助けて！！”」
＊「そこまでだ！！」　誰かの声が響く。

スグレム「誰だ！！」　シークット「探検隊、トキタンズです。貴方をおたずね者として、拘束しにきました。誘拐犯、スグラみゅ…、スグラム。」

噛んだ。チャマー「　プッ、…とりあえず、リリを離して。」

スグラム「あ、トレジャータウンのか。新人か？」
あざ笑うように言い放つ。挑発に乗るチャマー。

チャマー「ムッ。なんだよ！」　スグラム「新入りに倒される程俺

はひ弱じゃない。」

シークット「……るさい。」ものすごい爆音がした。
シークット以外「！！！！！！！うわっ！」

一気に岩肌が崩壊する。
シークット「ねぇ、うるさい（ニコッ。」どうやら、子供を誘拐しておいての態度が気に入らない
様だった。　シークットの周りに黒いオーラが流れる。相当、苛立っているようだ。

チャマー「（怖ぇ……、）。」スグラム「……（。д。）。」
リリ「（キエエエエェェェ！オコッタアアアアアアァァァ！！）」
多分属性が変わったのだろう。髪が黒になっている。（悪属性です。）
シークット「チャマー、リルが待ってる。早く。」
チャマー「う、うん！そうだよね！」

スグレム「（厄介だな…。あのひ弱そうな女の方が怖ェじゃねえか…。」

バトル　　スタート＝＝＝＝＝＝＝

スグラムは何かを飛ばしてきた。
瞬間的によけるシークット。チャマーもなんとか避ける。
スグラム「チッ…。」舌打ちと同時にチャマーのバブル光線と、
シークットのシャドーボールが飛んでくる。

スグラムはねんりきを上手く使って避ける。が、
一安心したのはつかの間、シークットのシャドークローが後ろから襲ってきた。
スグラム「……！」　シークット「よっこらせ…と、どうも、犯罪者。貴方ロリコンですか？」
一瞬にして相手を怒らせるシークット。さらに。
チャマー「ロリコン、ダメ、絶対。」追い討ちをかけるチャマー。
スグラム「なめやがって…ッッ！！！」
シークットはどうやら挑発が上手なようだ。催眠術をかけようとするスグラム。
しかし、シークットはそれを避ける。
チャマー「ｚｚｚｚｚ。」どうやら、チャマーがかかってしまったようだ。
シークット「あ。」チャマーの元へと駆け寄る。
スグラム「（いまだ！）」と、ねんりきでとがった岩を飛ばす。
シークット「！！！」急いで避ける、が、頬をかする。なんとかチャマーのところへつく。
シークット「（催眠術ね…。）」チャマーを庇う様に前に立つ。
シークット「（あまり動いちゃ駄目ね…。）」チャマー「うぅ…キレると怖い…。」
寝言を言うチャマー。

シークット「……。」手をかざす。スグラム「…？」
そして目を閉じる。スグラム「（まさか…コイツ…ガースとバールが言ってた…？）」

考えている間に、手から、あくのはどうが発される。避ける術もない。
スグレム「うおおおお！！」　鼓膜が破けるほどの音がする。
案の定、スグレムは戦闘不能。シークットの勝ち。

トキタンズ　勝利。

ほわ…と元に戻るシークット。リリに手を差し伸べ、
シークット「大丈夫だよ。」　と声をかけるシークット。
リリ「うわあァァん！！」泣きつくリリ。泣いている子供のなだめ方など知らないシークット。

とりあえず撫でる、すると、フィールドの上から羽が降ってきて、頭に触れた。

何かの映像が流れる。

“馬鹿。溜め込むなよ。”　“う…うわあぁぁん！！”
少年が少女をなだめている光景だった。彼もまた、不器用なのだろう。
暫く泣いた少女は顔を上げる。
“ごめん。ありがと、”　“無理するんじゃねぇぞ。”　“ありがとう…”
名前を少女が言いかける。その瞬間に現実へと引き戻されるシーク

ット。

シークット「…あ。」気が付く。自分も、こういう風になだめられた事などあるのだろうか。
と考えるシークット。その間に、
リル「リリ！！」リリ「お兄ちゃん！！」　リルと誰かがやってきた。

＊「地域保安官ノジールデス。オタズネモノヲ回収シニキマシタ。」

全ては無事に終わった。チャマーも目が覚め、スグラムは保安官に連行され、
リルとリリは無事に会った。

クリア

第七話

トゲトゲ山（後書き）

どうもでした。私ネーミングなさすぎてやばいです（笑）
実は修学旅行行ってましたw
では。

不思議な夢？とふしぎな羽（前書き）

原作は…関係あまり無いかもです。
ギルドの仲間がなんたら…みたいな？

不思議な夢？とふしぎな羽

その日の夕食。
相変わらずの食いっぷりなギルドの先輩たちを眺めながらシークットは夕食を食べていた。
シークット「（皆ワイルドだなぁ…）」ちまちまと食べながら考え事をする。

シークット「（そういえば…変な夢？といい、羽といい、何だろう…。）」
一方横では、＊「ヘイヘイ！あいつが？」ラープ「そうだが…。」
＊「なんか、弱そうな奴じゃねえか。」ラープ「それが違うんだよ。」
何かの会話をしている。
ラープ「おい、シークット。」シークット「（でもなぁ…夢？は何なんだろう。
羽もなんだろう…うーん…。）」ラープ「おい。」

シークット「（分からない…なぁ…。あ、そうだ。もしかしたら…。）」

ラープ「…シークット！」　シークット「あぃ？あ、ラープ。」
＊「ヘイヘーィ！やっぱ弱そうじゃねえかい！」
シークット「…うん？（誰…？）」ラープ「すまない。ウチの所のヘイニーだ。」

ヘイニー「で、どうやって雷とかだすんだよ。」シークット「…色々。」
ヘイニー「ヘイヘイ！出してみろよー！」シークット「えっと、へ

イニー君後ででよければ。」

＊「ヘイニー辞めろよ。困ってるぜwグへへ。」ヘイニー「オマエだって見たい筈だろー！
グレール。」　グレール「まぁ、しつこい奴は嫌われるんだぜw」

ヘイニー「うるせー！」グレール「wwwww。」
喧嘩が始まる。シークットは争いはあまり好かないので、さっさとその場をさって、
早めにお風呂場へと向かった。

シークット「…雷…かぁ。」自分の手首を見てみる。

変な夢？といい、変な記憶といい、自分はどうにかしている。
シークット「（はぁ…。）」　ちゃぽん。と一人湯船で物思いにふける。
シークット「でも…私だけじゃない筈。」なんと言わないと、どうにかなってしまいそうで。
風「あ、先入ってたんですね。」風が入ってくる。

シークット「…あれ？キマリアは？」
風「あぁ、またドガールと言い合い始めちゃって…。」
シークット「言い合い？」風「えぇ。あの人達いつもそうなんです。」
話によると、すごく仲が良くないらしい。
風「でも、仲がいいほど喧嘩する…とかありますしねェ。」

シークット「ふーん…。」ちゃぷ。と口の辺りまでお湯につかる。

風「なんか悩みでも？」シークット「……。」

黙って手首を風に見せるシークット。
風「…！これ…は？」　シークット「分からない。」
シークット「多分コレで属性が変わるんだと思う。」

風「……。」シークット「ごめん。引いちゃったよね。」はぁ。
と心の中で
見せなければよかったなどとため息をついた。

風「これ…どこかで…？」シークット「…？」風は何かを考えている。
風「なんかこの模様どこかで見たかもしれないです。」
シークット「本当？」　風「確か…、最果てのカミルのあたり…。」

シークット「…カミル？」風「えぇ。あそこらへんは遺跡が沢山ありますからね。」

なんだかんだと話をして、今日は解散となった。
シークット「（ちょっと長風呂しちゃったかな。）」
そのまま、疲れたのか、眠りに着いた。
風「……今度母に聞いてみましょう。」
なにか、なにか、嫌な予感がする。あまり人には見せてはいけないような…気がする。

第八話クリア

不思議な夢？とふしぎな羽（後書き）

今回短かったですねw
では次回で。

※お知らせ。（前書き）

本文に書いてあります。

※お知らせ。

こんにちは。
シークット「こんにちは。」
今回はどーでもいいお知らせを言いに来ました。
シークット「別に本編には…か…ん…わからないけど。」

実は、コレと別に未来編のを書こうと思っているのですが。

シークット「ネタばれの可能性。」
があるんで…どうしよ～かなwとか。
あ、あとキャラクターなどもそこに設定を書こうと思います。
シークット「まぁ、ネタばれでも書くけどね。」

…私ネタばれ結構嫌いではないので☆。←おい
シークット「…で、私が未来に居たときの生活を書くらしいです。」
ちなみに物語は大体原作にはないものばかりです。

シークット「こんなんぽけ○んじゃない！って方は見ないほうがいいかも。」

未来編についての説明。

・シークットが未来に居たときのことを書いてあります。
…で、ジュプトル（名前違うけど）とか出ます。
キャラの設定もそっちのほうに多くのせます。
……あ、恋愛ネタ注意！多分結構出てきちゃうと思うので。
実を言うと私恋愛描写とっても苦手です（え）。
あとは、未来編はちょっとグロいと思います。（流血は結構…。）

あ、でもエロは…あ～…多分入らないと思います。
あ、下ねたはあるかもですが。

てか、シークットが記憶を失うまでだけど…。
でもでも、キャラの資料とかもあるんで結構長くなるかもです。

あとあと、恋愛のことで。
本編のほうで、誰とらぶらぶ（笑）になればいいと思いますか？（主人公が）
一応私の中で候補はあるんですがね…。
一番候補　ジュプトル（名前違うけど）
二番候補　ギルド長（バルーン）
三番候補　ラープ（ペラップ）
四番候補　パートナー（チャマー）

でも、パートナーはありきたりすぎるんですよねw
でも他のもありますよ。
ぐれっぐるとか。
とりあえず…なんかそれをもうすぐあげるかもです。
では！
シークット「バイバイ。」

※お知らせ。（後書き）

未来編は本編とうまくかみ合わせてよんでいくと、
面白くなる…かも。

秘密のベランダとときのはぐるま（前書き）

かなり重要人物なあの方が登場です。
…が、まだ名前はでません。
…あ、でも未来編ではもう少しでます、では。

秘密のベランダとときのはぐるま

その夜は、嵐の夜だった…

夜中に、ふと、シークットは目覚めた。

シークット「…嵐…。（確か私が海に落ちたと推測される日も嵐だったんだっけ…。）」

窓を少し開けてみた。不思議と雨は吹き込んでこない。

シークット「（雷もなってるなぁ…。）」

ここで、シークットはあることに気が付いた。

窓の下に、隠しドアらしきものがあり、ベランダ？に出れるような仕組みになっている。

シークット「（わぁ……でも、今日は雨だし…。出ようかな…？）」

迷いつつも、隠しドアをあけ、外へとでる。

シークット「（…！屋根がついてる。）」少し驚きながら、立ってみる。

シークット「（すごい…。）」そこは崖に立てられたところだったので、かなりの絶景だった。

＊「やぁ♪夜中に出歩くのは危ないよ♪」

いきなり横から声を掛けられる。

シークット「おぉお！？…あ、バルーンかぁ…。」

派手に驚いてみせる。

バルーン「ははっ♪ごめんごめん。」

シークット「作ったのはバルーンなの？」バルーン「し～…皆起きちゃう。ラープが来ると面倒なんだ。」少ししかめっ面になる。

そのとき、雷がなり、バルーンとシークットの顔を

一瞬照らした。シークット「！？」バルーンはフードを取ってい

たのだが、
その素顔があまりに普通の青年だったので、少年だと思っていたシークットは驚いた。

バルーン「ぁ、あのフードね？あれ被ると誰でも幼く見えるんだ♪」
シークット「そうなんだ…。」はは…。と少し愛想笑いを浮かべる。

バルーン「にしても、あの仕掛けに気づいたの君が始めてだよ♪」
シークット「本当？」　バルーン「うん♪あ、こんな時間だ。さ、寝ようか。」
シークット「おやすみ。」

…部屋へと戻る。
シークット「…明日も早いし、早く寝よう。」くぅ…とすぐに寝息を立てるシークット。

一方、ある、森の中。
雨の中を誰かが走る。そして、何かが光っているところで誰かは止まり、
その光の原因を…盗った。
時が一気に止まる。誰かは、逃げながら、呟いた。

＊「…これで、一個目。」

雷も、雨も、明日の朝にはやむだろう。
…まるで、その誰かが光るものを盗むのだけを拒んでいたかのように。

秘密のベランダとときのはぐるま（後書き）

どうもでした！
なんかネタが…ｏｒｚ
まぁ、頑張ります。次は…分からないです。では！

ときのはぐるまと懐かしさ（前書き）

どうもです。
なんかもう生きる希望がないですw
二日ほど更新してませんでしたね。ごめんなさい。
では。

ときのはぐるまと懐かしさ

朝…。いつものように起こされ、朝会。

ラープ「あ～…解散の前に少しニュースがある。」

ヘイニー「ヘイヘーィ！重大かい！？」

ラープ「…少し…な。」そういい、紙を広げ、内容を知らせる。

ラープ「どうやら…、東の森の、ときのはぐるまが盗まれたそうだ。犯人は不明。」

ドガール「盗んでも利益はないはずだ。」

グレール「…だな。グヘヘ。」

少し不穏なムード。しかし、

シークット「ときのはぐるま？それ、おいしい？」

全「…。」ラープ「こほん。説明してなかったな。」

ラープ「ときのはぐるまとは、ダンジョンにたまにある時を動かすのに必要なものだ。」

シークット「…（なんか懐かしい感じがする。）」

…そう。何故か、何故か私はその言葉に何かを感じた。

そして、その後もその、ときのはぐるまに振り回されるだろう…。

ラープ「…でそのときのはぐるまを取ってしまうと、時が止まってしまうわけだ。」

シークット「…分かった。有難う。」

その後、朝会は無事解散。後。

ラープ「…で、オマエたちには今日は見張り番をやってもらう。」

大切なこと

話が全く頭に入らなかった。
シークット「（…何か大切なことを忘れているような気がする。）」
何かが心のなかで渦巻いている。

仕事の内容も全く頭に入らなかった。
チャマー「…？どしたの？シークット？」
シークット「……せ……。」思い出せ。
思い出せ、思い出せ、思い出せ、思い出せ、思い出せ、思い出せ。

そんな言葉を心の中で繰り返す。
ぼーっとしながら、ぶつぶつと何かをいいながら仕事を続ける。

そんなことを続けていると、自分の中に一つ
疑問が浮かんだ。

シークット「（…あの、変な記憶に出てくる人って誰？）」
次々と新たな質問ばかりが浮かび、頭の整理が出来ない。

そんな感じで全く頭に入らず、仕事をこなしていた。
そして、何か、何かを思い出せそうな所へ来ていた。
シークット「（なんか忘れてる…。すごく、大切なもの…。）」

シークット「（いや…大切な…人）」
そう、思った瞬間に激しい頭痛に襲われた。
シークット「…ッ……！」チャマー「し、シークットどうしたの！？」

シークット「（…！！そうよ！物じゃなくて…私は…。）」
シークットはその場に倒れる。急いで風を呼ぶチャマー「チャマー「風！！シークットが！」
シークット「物じゃなくて…者だったのね…。」
とだけ、苦し紛れに言うと、意識が途絶えた。
すぐさま、シークットは医務室に運ばれた。
チャマー「シークット！大丈夫！？」

シークット「……。」
夢…だろうか。何故か此処は真っ暗で何も見えない。
そこにシークットの目の前に、誰かが現れた。
シークット「（誰…？？）」声が、出ない。
相手も、何か言っている。しかし、何も聞こえない。
何故か、何故かその人が、懐かしく感じて。何故だろう。
私、あの人のこと、知っている…？いや、名前も知らない。
でも、確信も無いけど…。

だんだんとヴォリュームが上がってくるように、耳が聞こえてくる。
しかし、ノイズが酷すぎる。分からない。
シークット「（分からない…分からないよ…。）」
そして、最後に…。
＊「……だ…、何処に……。」
ブツン、と、全ての音が途絶えた。と、同時に、目の前が明るくなってゆく。

シークット「（待って！！貴方は…誰なの！？）」
青年は少し、寂しそうな顔をした。顔が殆ど見えず、誰かは特定出来なかったが、それだけはわかった。

目の前が、真っ白になってゆく。

シークット「（待って…私は…！）」
チャマー「シークット！！」
シークット「…う…ん……私…。」夢から、覚めたようだった。
風「良かった！目が覚めましたね。大丈夫ですか？」
シークット「…はい。」
少し、少しだけど、自分は真実に近づけたのかな。
私は何者だったのだろう。そう考えると、怖いよ。

シークット「ごめん。いきなり倒れちゃって。」
どたどた、と、倒れたという情報を聞き、医務室にやってくる人々。
バルーン「倒れたんだって？大丈夫？」
レマリア「キャーー！心配しましたわよ！」ラープ「オマエ…大丈夫か…？」

恐怖に負けないよう、怖い。そんな感情を心の隅に押し込んで笑った。
シークット「…大丈夫。少し疲れていただけ。」
ねぇ、私。こんなにもう、私には帰る場所も、仲間もいるじゃない。わざわざ…思い出しても傷つくだけなんじゃないの？

ううん。傷つくのが分かってるから思い出すの。
知らないことがあるなんて、嫌じゃない。私だっていつかは、思い出す“運命”なんじゃない？こうやってる内にも、真実は近づいてくるよ…。だからね、私、探すよ。私を。
いいでしょ…私。

脳内会議。
自分は自分へ微笑みかけた。

空は、全てを飲み込むほど、青かった。

大切なこと（後書き）

ちなみに夢の部分は私の似たような体験から
とってますwなんかこういうネタ書いてみたかったw

La luna che io dimenticai

夜、夕食も終わり、普通にお風呂に入っていた。

自分は、意識が無いとき、魘されていたらしい。

シークット「……誰だろ。」

思い出そうとすると、頭痛がしてくるらしい。

…でも、別に真実はあっちから近づいてくると思う。

ていうか、絶対いつかは知ることになる。心の覚悟をしておかなきゃ。

風「隣いいですか？」　シークット「ん？どうぞ。」

ちゃぽん…と肩くらいまでお湯に浸かってみる。

風「…本当に、大丈夫でしたか？」

シークット「…何が…？」

風「いえ、ずっと苦しそうに何かを呟いていたんで…（倒れたとき。）」

シークット「…変な夢見てて。」

風「考えすぎはいけませんよ♪深く考えすぎると、惨劇を生み出しますよ。」

シークット「惨劇って…大袈裟じゃない…？」

風「……大袈裟ではありませんよ。で、何を考えてたんですか？」

シークット「いや、くだらない事だから…。」

曖昧に笑ってごまかすシークット。

風「…記憶を失くす前の“自分”のこと？」

シークット「…ごめんなさい。その通りだわ…。」

この子には嘘は通じないのかな…。女の勘ってのはこれなの？
風「…私も分からないけれど、きっと、良い人ですよ。」
シークット「…？何故そういえるの？」
風「だって、今のシークットさん十分良い人じゃないですか。」
風が笑った。つられて笑う。キマリアが勢いよく入ってくる。
キマリア「何を話してますの？？」
風「シークットさんの過去のことです。」
シークット「くだらないことだけどね…。」
キマリア「もしかしたら過去のシークットは露出ｋｙ…。」
シークット×風「それはキマリアでしょ。」
キマリア「そんなキッパリ言わなくても…。」
会話は盛り上がった。
あっという間に入浴の時間は終わり、部屋へと戻った。
チャマー「あ、シークット。おかえり。」
シークット「ただいま、早いね。」
チャマー「うん。そういえばさ…。」
寝るしたくをしながらチャマーは質問を投げかける。
シークット「うん？何？」
チャマー「…“物じゃなくて…者だったのね…。”ってどういうことだったの？」
シークット「それは……ッ！！」
また同じ頭痛が襲ってきたようだ。しかし、今度は少しですんだ。
チャマー「大丈夫！？ボクなんか変なこと言った？？」

心配そうなチャマー。
シークット「ううん。大丈夫、すこしのぼせちゃったかな（笑。」
チャマー「…そっか。いつも長いからね。」
シークット「会話が面白くて…。」二人は笑った。

チャマー就寝後…
ベランダへの抜け道を通る。
そこには綺麗な夜景が広がっていた。星と、つきと、海。
心地よい夜風が身体を包む。
シークット「綺麗…。」
風に乗って、どこからか、草笛の音色が聞こえた…気がした。

シークット「……遅いし、もう寝ようかな…。」
部屋へと戻っていくシークット。
そんな様子を見ている人物が二人、いた。
＊「…ボク、思うんだけどさ。」
＊「何です？」　＊「…あの子、この“時代”の子じゃない。」
＊「はい？」　＊「…と思う。」
＊「どうしたんです？イキナリまじめなことを…。」

＊「君、あの子の右の手首見た？」
＊「いいえ。」　＊「…そっか、じゃあなんでもない。」
＊「気になるじゃないですか！」

＊「あはは♪じゃあボク眠いからもう寝る。」
＊「はぁ…、見張りに戻りますね。」　＊「はーい、おやすみぃ…。」

一方、東の森のあるところでは、

＊「次はここだな…。」
一人の青年が何かの計画を着々と立てていた。
＊「…本当に、何処に行ったんだ…。」

夜は、世界全体を包み込んで、月の光がやわらかく照らす。
星は、月の光に邪魔をされながらも、自分の持てる光を最大限に発揮する。

夜の空は、全てを漆黒に染め上げ、何もかもの音を奪う。
時が止まったようで、止まってはいない。
そう…今は。

La luna che io dimenticai（後書き）

なんかだんだん厨ニになってますね（笑）
まぁいっか。
あ、タイトルイタリア語ですが、言語はあまり関係ないです（笑

初めての探検（前書き）

…本当は章分けるんですよね…、面倒くさいからいいか…。

初めての探検

次の朝、いつものように朝会も終わった。

ラープ「オマエら、ちょっと来い。」
チャマー「はーい。」シークット「はい。」

ラープ「今日はオマエらに、ひみつのたきの調査を命じる。」
と言い、資料を渡すラープ。

チャマー「もしかして…探検??」急にきらきらした目になるチャマー。
シークット「…（確かタンケンは美味しくなかった筈…。）」

ラープ「あー…、後は、ちゃんと準備してから行くんだぞ。」
シークット「了解です。」
ギルドを出る。
チャマー「いやあああぁっほおおおぉぉ!!!」
シークット「な、何?どうしたの…?」
チャマー「初めての探検だよ!!ボク探検したかったからさ〜…。」
すごく、少年時見た目をしている。
夢見る少年（普通は乙女）の目だ。

シークット「そうなんだ…。探検…ねぇ…。」

といいながら、滝へと向かい、やっと着いた。
チャマー「…調べようがないよね…。」
すごく…大きな滝だ。勢いがすごく、近づいたら、吹き飛ばされそう…。

チャマー「…うわッ！本当に飛ばされそう！！」
滝にちかづいて飛ばされるチャマー
一応、試してみる。
シークット「…ッわ！」確かに、凄い。
本当に飛ばされそうね…。

シークット「（…！また…？）」
頭痛、そして、何かの夢のような映像。
誰かが、滝の中に飛び込んだ。その中に洞窟が…。
シークット「ん？」　現実に戻ったようだ。
チャマー「どうしたの？シークット？」

シークット「ん…なんか…その…。」
チャマー「もしかして、また変なの見たの？？」
シークット「うん。」
夢の内容を話す。

チャマー「滝の裏に…！？」
シークット「……うん。」
チャマー「…もしさ、壁だったら…。」

シークット「…即死。」
即答するシークット。
チャマー「えぇえ…でも、ちゃんと調査しなくちゃ…。」

といいながら、かぶっている帽子をきちんとかぶる。
チャマー「…ボクは、シークットを信じるよ…。」
震えながら言う。カッコイイ？せりふなのに、震えながらでイマイチ説得力

がない。
シークット「…分かった。有難う。」
チャマー「行くよ！1…2の…。」
シークット×チャマー「さーーーん！！！」
掛け声と共に、二人は、滝に飛び込んだ。

滝の中の洞窟、誰かの影。（前書き）

厨二タイトルなのは気になさらないでください（笑

滝の中の洞窟、誰かの影。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シークット「（んぅ…？確か…滝に飛び込んで…。）」
チャマー「うぅ…お腹打ったあぁ…。」

シークット「…おぉ。」
チャマー「ん？どうしたの？」

シークット「生きてる。」チャマー「当たりまえだよ！」
シークット「ん…？変な夢？と同じだ…。」

チャマー「ど、洞窟だ！！！」
シークット「（…私って、予知能力でもあるのかな。）」

チャマーに手を引かれ、洞窟の中をさまよう。
チャマー「すっごい…！」
シークット「こんな所があったのね…。」

なんか道の所々に水晶のような物が落ちていた。
シークット「きれー…。」
口々に言いながら進む。

そして、ついに一番奥まで来たようだ。

そこには、色とりどりの宝石がたくさんあった。
そして、中央の大きな宝石。
それが目に留まったようだ。

チャマーはそれを引き抜こうとするが、なかなか抜けない。
チャマー「うーーーん！！っぷぁ！駄目だぁ！」
シークットも少し引いてみる。
シークット「おっんも…っと！やっぱり駄目ね。」
チャマー「そっかぁ、ボクもう少し頑張る！」
シークット「頑張って（ニコッ。」
…と、チャマーは宝石を引っ張る。
シークット「（…ん、まただ。）」
クラっと、夢のような物を見る。
それは、誰かが宝石を押した、すると、横から水が流れ、それに流され…。
シークット「…！ふぉ？」
そこで、現実に引き戻された。
そして、宝石を押すな、と言おうと近づいた瞬間。
チャマー「引いて駄目なら…押してみれば…！」
シークット「やめっ…！（ちょ、押さないでー！！）」
カチッ、と何かの音がした。
シークット「やってしまったぁ…。」
チャマー「ん？どうしたの？」
ゴゴゴ…、という地鳴り。そして、
水が、滝のように流れてきた。
チャマー「えぇえぇえぇえ！？」

シークット「／（＾０＾）／」
その水の勢いに飲まれ、流された。

チャマー「うわわっ！！」
シークット「わっぷ！」
暫く流されたのだろう。
頑張って水面に顔を出し呼吸をしながら流されていると、
目の前が明るくなった。そして、空に放り出された。

シークット「え？」
ジャボーン、という水音。
沈む、と思ったが、不思議と浅い。
と、いうか。浅すぎて体を打った。

シークット「あいったぁ…。」
チャマー「あれ、シークット？ボク何してたんだっけ？」
どうやらさっきの衝撃で目が覚めたらしい。

ここは…池？だろうか…。
＊「ん？なんじゃ君たちは…。」
ふいに老人の声がする。
まぁ、声のとおり、そこには老人が立っていた。

初探検終了

＊「…？あぁ、バルーンのところのではないか。こんなところまでどうしたのじゃ？」

チャマー「えぇえっと、宝石を押したら流されて…。」
シークット「（はぁ…。）」

＊「ん？宝石…とな？」
チャマー「うん。そこから…かな、そこからこの池に落っこちたんだと思う。」

＊「ほうほう…、あ、すまん池のコイキングが…。」
シークット「コイ…コング？」チャマー「コイキング」
コイキング「コッ…ココッ…。」

ザバ、と水から上がる。
＊「なんですし、お茶でもどうですかな？」
チャマー「本当？ありがとう！温かいのが良いな！」
シークット「ふえっくしょん！…うー…さむ。」

老人の家の池に落ちたのだろう。
老人のいえに少しお邪魔した。

＊「おぉ、ところでお名前を拝見してなかったのぅ。」
チャマー「ボクはチャマー。」
シークット「シークット。」
＊「ふむ、シークットにチャマー…君かのう？新入りか？」

チャマー「うん。新しくチームを組んで活動してるんだ。」
＊「ほうほう…わしはコータじゃコー爺とよばれておる。」

チャマー「ふーん…あ、あれだよね！物知りお爺さん！」
コータ「ふぉっふぉっふぉ、よく知っておるのぅ。」

この老人とともに、少しのお茶を楽しみ、ギルドへと戻った。

ラープ「ふむふむ、滝の裏には洞窟があってそこにある大きな宝石があり、それを押すとコータ長老の庭池に繋がっている…と、大発見じゃないか！オマエらよくやったね♪」

チャマー「やったーーー！」
シークット「（でも…あれは私たちの前にも入った人がいた筈。）」
チャマー「ん？どうしたの？シークット。」

シークット「え…？えっと、私たちの前にも誰か入ったんじゃないかな…って。」

チャマー「え？ボク達が最初のはずだよ！」
シークット「（あ…あの人影は…確か…えー…っと……！！！）」

シークット「バルーン親方！？」
チャマー「へ？バルーン親方がどうしたの？」
シークット「バルーン親方は前あの洞窟にはいったんじゃないかなって。」
ラープ「そんな筈はないんだがねぇ…まぁ、聞いてくる。」

親方の部屋へと歩くラープは独り言を呟いていた。
ラープ「ジブンたちの手柄を捨てるなんてヘンな子だねぇ…。」

しばらくして、ラープがチャマーたちの所へときた。
チャマー「どうだった？」
ラープ「あぁ、それが…。」

バルーン「思い出…思い出…たあーーーーーーッッ！」

ラープ「…とかいって、」

バルーン「あ、よく考えたらそこ行ったことあったかも！」

ラープ「だそうだ。」

チャマー「（，・ω・、）」
シークット「（あたった？）」
予想、的中。

チャマーは少ししょんぼりしていた。
しかし、夕食の鐘がなると、すぐに目を輝かせて飛んで行った。

シークット「流石。」
などと思うシークットだった…。

何かしらのおまけ（、・ω・）（前書き）

※色々注意。

何かしらのおまけ（、・ω・）

こんにちは。
シークット「こんばんは。」チャマー「はふぁようごじゃる。」
何故か噛んでいるのが一人いるけれど気にしない方針で。
チャマー「ちょっと酷くない！？」
てかとりあえずキャラと会話をしてみたいと思わない。
なので適当におまけでも何でも書いてみます。

多分おまけだとおもいます。

おまけ会話その？。
あほ毛。

シークット「とうっ！…ていっ！」
眠る前にあほ毛と戦うのが日常になっていた。

チャマー「どうしたの？」
シークット「…ヘンな毛が立ってるの…。」

チャマー「あー…たしかになんかミョーンって出てるね。」
シークット「直らないかなって…。」

チャマー「うーん…取れないの？」
とかいって引っ張ってみるチャマー。
シークット「いたたたたた！！！」

チャマー「あ、ごめん。」

頭を抱えるシークット。
シークット「頭皮がむけるかと思った…。」

その日から、チャマーはあほ毛について調べた。
結果。
シークットのあほ毛の機能。
感情とリンクしている。
温度、湿度計。
テレパシー機能。などなど…。
チャマー「うわー…。」

一言　それ、本当にあほ毛ですか？

どーもでした。

チャマー「えぇっと、次回は僕たちのライバル（？）
のちょうじょ…とっととうじゃ…。」

シークット「登場だそうです。以上おそまつさまでした。」

つづく？

ドクローズ登場！（前書き）

このドクローズ、そこまで嫌いではないw
原作のほうでも結局はいい人たちでしたからね…。

ドクローズ登場！

洞窟探検から、しばらく経ったある日。
少し落ち着き、次々と依頼をこなしていったトキタンズ。
そんな二人組みに、ライバル（？）が登場した。

チャマー「今日も平和だなぁ～。」
なんてことを言いながら、依頼掲示板へと向かう二人。
シークット「依頼、今日もたくさんあるわね…。」
チャマー「うん…、僕たちが助けなきゃ！」
シークット「そうね。」

依頼を見ていく。
チャマー「お、いいの発見。」
シークット「決定？」チャマー「うん。」
依頼書を持って出ようとした、そのとき。
梯子から二人人が降りてきた。

その、二人を見て驚愕した。
チャマー「…！！おまえらは！」
＊×＊「！！！」
シークット「…（誰だっけ。）」

チャマー「な…何しにきたんだよ。」
＊「何にって…？依頼を探しにだ。」
＊「おまえら何時ぞやの…。」

シークット「チャマー、知り合いなの？」
チャマー「えぇ！？シークット覚えてないの！？」

シークット「…ご、ごめん。」
ガース「忘れられてますぜ？バール。」
バール「そうだな、ガース。」

にらみ合いが続く。不穏な不陰気がギルド内に漂った。
シークット「あ…えっと…、チャマー止めようよ…。」
ガース「ま、おまえらにはこの前負けたけど、」
バール「そりゃ親分が居なかっただけなんですぜ？」

チャマー「だからなんだよ、僕達が勝った事には変わりないじゃないか。」
シークット「（ここギルド内だよ…；どうしよう…。）」
既に周りの注目を集めている。
そんな中、親分と呼ばれる男が降りてきた。

ガース「親分！まちかねましたぜ！」
バール「こいつです！」
指を指される。
親分と呼ばれた人がだんだんと近づいてきた。

＊「お前等か。ガースとバールを倒したって奴は。」
チャマー「そうだよ。」
思いっきりおびえているが、どうやら強がっているようだ。
シークットはそんな状況を見ながら、
シークット「（太ってるな…この人、何食べてるのかしら…。）」
少し場に合わないのんきなことを考えていた。

チャマー「ねぇ、シークット。」
シークット「はいぃ！！」
唐突に話を振られて困惑するシークット。

チャマー「僕達、この人たちに勝ったよね？」
シークット「…う、うん。」

＊「ほう、俺様はダンク。このチームドクローズのリーダーだ。」
チャマー「ボクはチャマー、チームトキタンズ。」
シークット「シークット、同じく。」
軽い自己紹介…なのか？

ダンク「まぁ、依頼を探しに着たんだが…気が変わった。」
チャマー「…？」シークット「…。」

ダンク「お前等のチームを潰すのも悪くねぇな。」
チャマー「えぇっ！？」　シークット「（´・ω・）。」
ガース「流石親分！」
ダンク「お前等は下がってろ。俺様一人で十分だ。」

ざわ…、ざわ…、と周りでどよめきが起きる。
勿論、チャマーがこのダンクとやらに勝つことは…、
出来ないに等しいだろう。（圧し掛かられたらのことを考えてw）

チャマー「……。」
ダンク「覚悟はいいかぁ？」悪人面が更に強まる。
シークット「（チャマー一人だと危ないよ…。）」

その予感は当たったわけで、かなりの苦戦していた。
シークット「（どうしよう…行くべきだよ…！）」
何へたれてるの私ッ！！！

ダンク「ヘッ、大口切っておいてずいぶん弱ぇじゃねえか。」
チャマー「（うぅ…強いよ…こいつ…！）」

ダンク「これで最後だな。」
とっさに、チャマーを庇う様にして立ちはだかったシークット。

ダンク「あぁ、お前もそいつの仲間だったっけか？」
シークット「t…チャマーをこれ以上傷つけないで！」
シークット「（大丈夫。…でも、雷とかだとギルドが…。）」

ダンク「女だろうと俺様は手加減しねぇぜ？」
シークット「…。」
何を緊張してるの私。こんな相手楽勝じゃない。
シークット「（そうよ…楽勝、楽勝…。）」

ゆっくりと閉じた目を開く。
と、同時に腕の何かが反応したようだ。
目と髪が白銀に変わる。（鋼属性）
シークット「……！（来る…！）」
そこまで俊敏性は無いようだ。
しかし、技の一つ一つの力強さ。破壊力があるのだろう。

シークット「（決めなきゃ…！）」
光が、シークットに集まってゆく。
チャマー「！！！」
周囲の人「…！」危険を、どうやら察知したようだ。

技名など、本人にはよく分からない。全部、とっさなのだから。
ダンク「（アレが撃たれる前に…！）」
シークット「…ッ！！（頭が…。）」

バルーン「はーい！ストップー！！」
場が硬直した。ココのギルドの親分、バルーンだ。

ラープ「何そこで喧嘩してるんだい！！」
一旦ココで中止だろう。
ダンク「チッ…行くぞ」
分が悪いのかそそくさと逃げて行ったドクローズ。

シークットは技を出すのを中断した。
チャマー「ふうぅ…。」ぺたん、とその場に座り込む。
シークット「チャマー…大丈夫？」
チャマー「うん。シークットは？」
シークット「大丈夫。」

ラープ「で？何があったんだい？」
夜、事情聴取（説教だろう）の為にギルド長室に呼ばれた二人。
あったことを洗いざらいに話した。
勿論、説教も受けた。
なぜか不思議な点があった…。
ラープ「そうだ、シークット。オマエ髪と目の色が変わってなかったか？」

つづく？

ドクローズ登場！（後書き）

駄目だ、最近スランプです；
あ、合唱コンクール歌いたいのになってやふいです！
夏休みですね…受験生なのになにやってるのですか私ｗｗ
では。

今更な話（前書き）

すっごく放置してましたw
あ、あとやっと部活終了ですw

今更な話

前回までのあらすじ。
ラープ「そうだ、シークット。オマエ髪と目の色が変わってなかったか？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
シークット「ん…？目と…髪が？」

チャマー「あー…多分属性によって変わるんじゃないかな？」

ラープ「オマエ何属性なんだ…。」
バルーン「だから結構前に全部…って言わなかったっけ？」

ラープ「普通全属性なんてありませんよ！」

チャマー「それもそうだね…、何でだろう？」

ちょっと考えてみる。
本人には心当たりがあった。

シークット「あ、もしかしたらさ…これ…かな？」

右手首を指差して言ってみる。
チャマー「そこなんか手袋みたいなやつしてた所だよね…？」

シークット「今から外すよ？」
何回か見てきたが完全に外してまじまじと見るのは初めてだ。

相変わらず刺青にも見えない。
何かの紋章…だろうか？
（未来編で微妙に分かるかもです。）

ラープ「何だ？これは…。」

バルーン「…。」

シークット「えぇっと、いろんな色の石がはめられてるけれど、
ここの針らしきのが指しているのが現在の属性みたいなの。」

チャマー「へぇー…、いいなぁ…。」
シークット「何処が？」
これの所為で全属性が使えるのかは今のところよく分からない。
でも一つだけ分かるのは、自分が周りの人と少し違うこと。

ラープ「でもなんか神秘的っていうか…。」
バルーン「ココだけ石みたいのがはまってないね…。」

シークット「本当ね…。」　チャマー「本当だ…。」

ラープ「うーん…ちょっと調べるか…。」
バルーン「そうだね♪あ、二人はもう部屋に戻っていいよ♪」

チャマー「あ、うん。」

部屋にて…、少しの間その変な紋章みたいなのをいじってみた。
普通に肌と同化している。

シークット「……っはぁ、寝ようかな…。」

チャマー「おやすみ～。」　シークット「うん。」

今日は三日月のようだ。

シークット「（多分そのうち…分かるよ…。）」

そう、心の中で呟いて眠った。

ギルドの遠征（前書き）

やっとここらへんまでたどり着いたーーー！！！！！
長かったです！

ギルドの遠征

朝。いつものように、ドガールの雄たけびで目が…

ドガール「うおらあああああああ！おきろおおおおおおお！！！！！！」

覚めすぎて辛い。

チャマー「…シークット…お早う…。」

シークット「お…お早う…。」

朝の朝会にて、

ラープ「あ～…、あとは…。」

バルーン「そうそう、今度遠征があるよ☆」

唐突すぎるがどうやら本当らしい。

ラープ「あぁ、で、その事についてだ。

これから遠征メンバーの選出がある。」

チャマー「…（遠征！！）」

シークット「おいしいのかな…（呟く）」

ラープ「今日から発表の日までの成績で分かれる。

遠征に行きたい奴はいっそう活動を頑張るように！」

バルーン「じゃあ今日も一日、張り切って行くよー！」

全「おーーーーっっ！！！」

チャマー「遠征だってよ！シークット！！」

シークット「朝会から気になってたんだけれどそれっておいしいの

？」

チャマー「おいしくはないけどね…；なんかギルドの人たちで
遠くに探検に行くの！どこにいくのかな…。」

シークット「でも、遠征メンバーになる為には仕事頑張らなくちゃ
いけないんだよね…？」

チャマー「そ、そうだ！よし！早速依頼を探しに行こう！」

シークット「…了解。」

依頼の場所に向かうシークット達。

シークット「（…、遠征…かぁ。）」

のんきに歩いている…、そんなところを、

誰かが見ていた。

＊「お、いましたぜ？親分。」

＊「今度はきっちりと決着をつけなきゃあなぁ…。」

つづく？

ギルドの遠征（後書き）

どこらへんで原作からそらしましょうかね…、
多分この辺？この先からシリアスが多くなるかも警報
ですw

特に何も無い回（前書き）

なんか特に進展のない回です。
ん～…、展開は…どうなるでしょうかね…、
では！

特に何も無い回

次の日。
いつものように朝会が終わった後、
ラープに薬の調達を頼まれた。
…といっても町の薬やまでだが。

チャマー「ん～、ここの店だね。」

店員「いらっしゃいませー。」
ちらっと、貰った買う品のメモを見てみる。

・頭痛薬、胃腸薬、軟膏。
・あれば親方様の膨大すぎる食欲を抑える薬
それと親方様の頭を治す薬。

シークット「…苦労してるのね…。」
ちょっと一言零してから注文する。

シークット「すいません、頭痛薬と胃腸薬と軟膏ください。
あとあればで良いのですけど、食欲を抑える薬と
頭のねじを戻す薬、それとアホ毛が治る薬も。」

チャマー「メモに書いてないこと頼んでるよ…；」
シークット「だってなんかぴょこぴょこして嫌なんだもん…。」

店員「残念だけど、食欲を抑える薬とか頭のねじを戻す薬も
アホ毛を治す薬もないね…。」
シークット「じゃあ頭痛薬と胃腸薬と軟膏のみでいいです。」

店員「分かりました。＊＊＊pになります。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

チャマー「なんかラープ色々苦労してるんだね…。」
シークット「それだけバルーンのこと思ってるんじゃない？」

薬を購入して、さっさとギルドに戻った。

ラープ「おお、買ってきたか。」
チャマー「うん。」
ラープ「親方様の食欲と頭を治す薬はあったか？」
シークット「…残念だけど…。」

ラープ「そうか…；いや、駄目元だったからいいのだが…。」
落ち込んでいる。それ程事態は深刻なのだろう…。
バルーン「どーしたの？ラープー！！」
ラープ「いえ、なんでもないです。」

バルーン「そうそう、僕のセカイイチ切れちゃったんだけど。」
ラープ「食べすぎですよ！この前採ってきたばっかりじゃないですか！」
バルーン「ぶー、食べてたら無くなっちゃったんだもん！」
チャマー「（それ主にバルーンの責任…。）」

ラープ「…仕方ない、オマエら、リンゴの森の最深部に実っているセカイイチを採って来い。」

シークット「…セカイイチ？おいしい？」

バルーン「うん！すごく美味しいんだよ♪」

ラープ「…食うなよ？」
シークット「心配しないで。」
チャマー「じゃあまたいってきまーす！」

多分、このあとの乱闘は、二人は予測もしていなかった。
…先回りしようとする影にも気づかずに…

つづく？

特に何も無い回（後書き）

あそこのリンゴの森、トラウマでした。
何回も行きました…。
私主人公何回やってもピカチュウだった覚えが…
まあいいwまた次回、では！

りんごの森。（前書き）

すっごく久々な感じしかしない…；
まぁいいや（笑。
結構ここらへんから原型とかないかもです。では。

りんごの森。

…と、いうワケで私達は今、りんごの森に来たんだよね。

シークット「……りんごって、何？」

チャマー「ん？美味しいよ？」

そんなんも知らないの？と言う目で返された。

…これでも一応、記憶喪失している。

チャマー「ん、そっか。で、これがりんご。」

と言われて一つ手渡される。

シークット「赤い！」

チャマー「いや、そりゃりんごだから…、ボク色素の説明なんて出来ないよ。」

シークット「……食べ物？あ、甘いね。美味しい。」

しゃくり、と齧ると、歯ごたえのある果実が口の中へと入って、甘酸っぱい果汁のあじが広がった。

チャマー「美味しいでしょ？」

シークット「ふぇふぉふぁ…んっく、でもさ、なんかこんな赤いのばっかり

実ってるとちょっとグロくない？？」

と、言いつつ、りんごをバッグに数個つめこむ。

チャマー「ん？なにに使うの？」

シークット「んん？何か作れるかなって（しゃり）ふぉもんっくって。」

（訳：んん？何か作れるかなって思って。」

チャマー「あ～…もういいからさっさとセカイイチ採って帰ろう？」
シークット「そうね。」

その後も、色々なつまみ食いをしながら、
りんごも色々な種類があるのね…と感じたシークット。
無論、綺麗な花には？なにがあるだろうか。

バラにはとげがあるように、
りんごもバラ科の植物。
とげ（キメラ）がある（いる。）

チャマー「うわあああぁ！！まだうじゃうじゃ出てくるよ！！」
シークット「ふぉっふぁふぉふぉーふぇふぉふぃーふぁふぁい。」
（訳：そんなのどうでもいいいじゃない。）
チャマー「みっ見てないで戦ってよ！！！！」
シークット「んっく、チャマー一人でなんとかなりそうじゃない。」
属性の相性は悪いものの、
武器を持っているから有利である。

チャマーはボウガン（弓矢に近い）と剣×2を装備、
シークットは刀にピンチ用にと、使った試しはないが、
倒れていたときのバッグに入っていた銃を一丁装備している。

チャマー「いっ良いから！ボクもう疲れた…。」
シークット「よし、食べ終わった！」

随分と、チャマーは疲れているようだ…。
仕方が無いが、これから先のこともあるだろうしな、と考えた後、

シークット「コレでも食べてて！」
と、グミとオレンの実数個を手渡して、
キメラに立ちはだかった。

シークット「…（見た感じ…虫属性かな？）」
この前買ったばかりの刀を使ってみたいな、と思い、
構えてみる。

チャマー「おお！本格的！習ったの？」
シークット「風から構えとかの基本は教わったのよ…。」

チャマー「流石だね！さまになってるよ！」
シークット「構え”だけ”教わったんだけどね。」
チャマー「え？大丈夫なの？」
シークット「大丈夫！」

グロいうめきのあとに、キメラが襲い掛かってくる。
シークット「とうッ！」
と、間抜けな掛け声とは裏腹に、
すぱっと、キメラが斬れて、落ちた。

シークット「わ、切れ味すごい…。」
あと、言いたいことといえば、
キメラがモザイクが必要な事態になっている、ということ。

なんだかんだで、
キメラをなぎ倒しながら奥へと進んでいく…。

つづく？

りんごの森。（後書き）

暫くシリアスはお預けですね。
早くシリアス書きたいです（笑。
では！

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。上（前書き）

殆どシリアスは無いかもです。はい。
…ドクローズ出てくると殆どギャグに走る傾向が…、
私、ドクローズ嫌いなんです！
言っていいんですかねこれ、
なので扱いが酷い警告！（ヨノーレも同じく、
あ、でもヨノーレはどっちかっていうと、無理やり不陰気を
シリアスに持ってく人なんでｗ）

では！！

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。上

キメラを次々と倒していくシークット。

シークット「っふぅ、流石に少し数が多いね…。」
チャマー「もぉ…なんでラープわざわざ新入りにこんな厄介な事を…。」

シークット「Sなんじゃないの？」
チャマー「それ言っちゃ終わりだよ！！」

などと、他愛も無い会話をしながら奥へと進んでいく…、

そして、暫くして目当てのセカイイチの木が見えてきた。

シークット「…あの大きい木になっているのが？」
チャマー「多分、セカイイチだよ。きっと。」

やっとだ…、と小さなため息を吐いたシークット。
残念ながら、戦いはまだまだこれからで。

シークット「とりあえずさっさととｒ…。」
そこまで言いかけたところで、
いきなりシークットが倒れた。
チャマー「え！？ちょ、だ、大丈夫！？…！」

なんとか地面に倒れる前に受け止めたチャマー、
そして倒れた原因を予想して、ハンカチで口と鼻を押さえた。

チャマー「（毒ガス…？ぜんぜん臭いとか無かったけど…。）」

チャマーはバッグの中から解毒剤を探した。

チャマー「……（あったあった。）」
…と、解毒剤を見つける、が。

チャマー「（えーと？どうやって飲ませるんだっけ？）」

少し考えた後、テレビでいつか見たアニメを思い出し、
その方法を試すことにした。
とりあえず芝生にシークットを寝かせた。

チャマー「（確か薬を口に入れて、水で流してたね…、よし。）」

内心少しドキドキしながら、なんとか薬を入れて水で流した。

チャマー「…っはぁ。（お、終わったぁ～…。）」
すると、シークットが咳き込み始めた。
チャマーは効くの早くない！？と、思いながら少し様子を見ると、
うっすらとシークットの瞼が開いた。

シークット「…けほっ……ん？」
チャマー「だ、大丈夫！？」

シークット「うん…大丈夫だけど、何でハンカチ…？」
チャマー「行き成り倒れたから毒ガスかなんかかとおもって…。」

すると、少しキョトン、とした表情をしたシークット。

シークット「後ろに居るのはいつぞやの…、誰だっけ…。」

＊「まぁた忘れられてますぜ？」

＊「こいつらなめていやがりますぜ？」

＊「まぁまぁ早まるな。」

チャマー「……！！」

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。上（後書き）

短い！
ごめんなさい！
やっぱギャグになってしまう…！！
では！

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。下（前書き）

更新放棄気味…ごめんなさい；
あ、勉強とかじゃありませんよ？
ねたが浮かばなかったので…；ごめんなさい。では！

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。下

シークット「？知り合い？」

チャマー「え？覚えてないの！？」

少し、というかこの前会ったばかりの人達を忘れている。
この人まさか記憶喪失っていうか、単に忘れただけじゃ…、
と、思いながらも何とか説明をしようとする、と。

流石に相手もイラついたのか自己紹介をした。

？「ガースだ。」
？「バールだ。」
？「ダンクだ。」

チャマー「で、ドクローズだって、思い出した？」
何故最後三人で言うべきせりふをチャマーがとったのかは
気にしないでおこう。
ぬぅ？と、少しシークットが考えた。

シークット「……。」
チャマー「……。」

ふぅ、と一息つくとシークットは、
爽やかな笑みを見せて口を開いた。

シークット「食べ物じゃないことは思い出した！」

チャマー「見れば分かるって！！！」
シークット「と、いうか何でここに居るのかな？ん？」
笑ったままチャマーのつっこみをスルーして、
後方に居るドクローズ御一行に声をかけた。
シークット「君達もリンゴ目当てなの？」
待ってましたその質問、とばかりに。
答えた。
ガース「俺達はお前らを邪魔しに来た。」
と、どや顔で答えられる。
チャマー「邪魔…って…！わっ！！」
いきなり攻撃を開始され、
わっ！と、攻撃を避けた。
ダンク「おいおいバールしっかりやれよォ、避けられたぜェ？」
シークット「（嫌ね…、動きすぎかな…っちょっとふらつく…。）」
着地後少しふらつきながら考えるシークット。
なぜか少し自分の行動と見えている映像がずれている。
それに、脳が少し揺れているような…？
多分眩暈だろう。
チャマー「ひ、卑怯だよ！いきなり攻撃してくるなんて！」

なんとか避けたものの、少しお怒り気味のチャマー。
それを楽しむかのように笑う三人。

ガース「まぁそれで生計立ててるようなモンだからなァw」

ククッ、とリーダーであるダンクが笑う。
チャマーは随分頭に血が上っているようだ。
ようすろに怒っている。

チャマー「もうなんなの……。」

イライラ…と、もうかなり頭にきている様子。

シークット「落ち着いてチャマー！目的はそれじゃないでしょ！？」
深呼吸を促して、なんとか落ち着きを取り戻した。

ダンク「つまんねェなァwww。」

と、挑発してくるドクローズ御一行。
普段なら挑発返しでもかましたいところだが、
何せさっきから体調が可笑しい。

シークット「（動けるには動けるけれど…、さっきみたいに倒れたくないし…。）」

少しガンガンとする頭を抑えて考える。
心配したのか、チャマーが大丈夫？？と、顔を覗き込んだ。

大丈夫、と言いながら顔を上げた。

シークット「チャマー、さっさとセカイイチ採って帰ろう。」
チャマー「そうだね、構ってる暇なんかないよね…。」
ここは素直に通してもらおう、と話しかけた。
まぁ、そんなの、無理なのは承知の上だが…、
シークット「（やるしかないよね…。）あのさ、」
ガース「何だァ？」
シークット「私達は依頼を受けてきたんです。
邪魔なら違うときにやってくれて構いませんからどうか
そこをどいてください。」
チャマー「け…敬語！？」
ダンク「良いぜェwwwwwwwww。」
ガース「お、親分！？」
ダンク「安心しろ。」
…と子分たちに耳打ちをして三人とも悪そうな笑みを浮かべた。
すんなりと通すけれど、多分なにかあるのだろう。と、
予測はしていた。
ドクローズが去った後に、そのセカイイチが採れるという木についた。
チャマー「…あ！！！」
シークット「…はぁ…。」

その木にはセカイイチが一つも実っていなかった。

つづく??

ドクローズ？いいえ、オジャマーズです。下（後書き）

…え？ギャグなの？シリアルなんですか？
わ…分からない…！ごめんなさい；
ではまた。

どうしようもない（前書き）

タイトルどおりな展開になる…予定。です。
では！

どうしようもない

……ラープの頼みでセカイイチの収穫に来た私達。
流石にこれはないだろ…、という展開の果てに、こんなことに…。

シークット「……る。」
ぼそり、と誰にも聞こえない程度に何かを口走った後、
ガンガンと痛みをます頭を抑えて思考を開始した。

どうしようったって…、どうしようもない…というのが
私の答え。
…どうしてもセカイイチじゃなくちゃいけないのかしら…；
と、少しの疑問。

シークットはずっと何も言わずに俯いている。

具合悪いのかな…？
でも本人は大丈夫って言ってたしね…。
それも気になるけどやっぱ今はこの状況の打開策だね…；

いや、どう考えてもどうにもならないでしょ…。

その時、場に合わない愉快なメロディがなった。

シークット「？」

チャマー「あ、ボクのだ。」

と、何かを取り出したチャマー。

シークット「何それ？」

あ、そっか。とちょっと何かに納得した後説明を始めた。
チャマー「んーなんか、相手と通話？連絡を取れる代物だよ。」

と、いいながらチャマーがその物体を耳へ持っていったのと
ほぼ同時に、さいきんやっと聞きなれてきたキンキンとした声が聞
こえた。
声が物体から漏れてきているのでかなりの声量だろう。
声的には、ラープだろう。

ラープ「こんな遅くまで何やってんだい！！！！！！！！」

多分、今の声でチャマーの鼓膜は大変なことになった危険性がある
わね…。
と、思いながら辺りを見回すと、いつのまにか夕方になってた。
陽は強くないのだけれど、まだ体調があまり…。

チャマーは必死に電話に対応していた。
さて、ちょっと盗聴しよう、と盗み聞きをはじめた。

チャマー「ご、ごめん！というかこの森キメラ多すぎて…。」
ラープ「キメラ…？その森にはまだいなかった筈なんだがな…。」

チャマー「え？すっごくうじゃうじゃ…。」
ラープ「…まあいい、さっさと戻って来い。」

チャマー「え！？でも…。」
ラープ「この前の奴等がお詫びにって届けに来てくれたぞ。」

チャマー「…は？」
ラープ「だーかーら！ドクローズが届けに来たんだ。
採る必要が無くなったぞ。」

チャマー「（何企んでるのかな、アイツら…。）う、うん。分かった。」

プ、と通話を終了すると、

チャマー「帰って来いだって。なんかアイツら（ドクローズ）が届けに来たらしいよ？」
シークット「何を企んでるのよ…。」
ふぅ…と、なんかため息をついた後、
チャマーは、

チャマー「ボクにも分からないよ…、うぅ…なんか怖いなぁ…。」
と、かなりおびえた様子。
まぁ、どっちかというと、ドクローズより、
ギルドへ帰ることが怖いのだろう。
出来れば私だって帰りたくないわよ…。

っつ…、まだ頭が痛いしなんかのぼせてるみたい…？
視界がグラグラするし…。
はぁ…帰ったら風に…いややっぱり寝るわ。

出来れば帰りたくない、そんな願いも空しく。

＊＊＊＊＊＊＊ギルド＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ラープ「遅いよオマエ達！！！！！」

開口第一にこれである。

チャマー「ご…ごめんなさい…。」
チャマーが更に青くなって謝っている。
私も謝らなくちゃ。

シークット「ごめんなさい。」

ラープ「まぁ日没までに帰ってこれたのは良いとしよう。
　オマエ達、怪我は無かったかい？」
結局、怒っているのか心配しているのか…。
心の中でそう呟いて私もチャマーも怪我はないし、
大丈夫よね、と確認をした。

大丈夫じゃないかんじがするけど。

ラープ「はぁ、でもワタシの方にも愚が有ったからね、まさか
　あそこにもキメラが出てきたとはな…。」
シークット「？前は居なかったの？」
少し怪訝、というか、ちょっと真剣そうな目をして、

ラープ「…最近は調査を怠っていたからな…。」
とか、ぶつぶついいなら考え事を始めてしまった。

チャマー「とりあえず、夕食まだだし、自室に戻るかな。」
シークット「そうね、私もそうするわ。」

と、梯子を降りようとした時のこと。
いきなり私の視点、というか、視界が真っ白に染まっていった。
ぇ…、今この手を離したら落ちる…！

なんとかもがくが、体が言うことを利かなくなり、
ぼうっとしてきた。ふわっ、と私は意識を飛ばした。

梯子からいきなり手を離したシークットは下の階へと落ちた。
チャマー「え！？し、シークット！！」
ぎりぎりで手が届かず下にシークットは落ちた。

この高さだとそこまでではないけど…頭を打ったら…！
そして、だんだんと落ちていって、落ちる！
と目を瞑った。

チャマー「…？」
おかしいな、音がしない。…そこまでシークット軽かったのか。
確かに結構軽かったな…、て、そんなんじゃいよ！
目を開けて、恐る恐る下を覗いた。

チャマー「！バルーン！」
丁度通りかかったバルーンが落ちてきたシークットを受けとめたらしい。
あははーとのんきに笑いながら、
バルーン「よぉし☆ナイスキャッチー！」

ボスッ、と軽々しく受け止めたバルーンはニコニコと笑っていた。
よ…良かった…。落ちなくて。
なんとか頭をぶつけなくて良かった…と思いながら、
梯子を降りた。

チャマー「バルーン、ありがとう！ボクどうなるかと思った…。」

どうやらまだ目は覚めないらしい…。
バルーン「とりあえずえっと、熱でもあるのかな…？」
チャマー「そうかもしれないね…、具合悪そうだし、今も苦しそうだし…。」
バルーン「そうだね～☆よし、じゃあ医務室にれっつごー☆」
るんるん♪と歩いていくバルーン、なんか心配なので一緒についていった。

疲れた

つづく？

どうしようもない（後書き）

最後辺りの疲れたはただのつぶやきです。
ごめんなさい；
では！

火照る。（前書き）

疲れた…。
ごめんなさい；では、始まります。では。

火照る。

また、夢の中。

魘されていた。

どこまで歩いても、何もない。

後ろから暗い闇。

走って、走って。

……。

チャマー「風！居る？」

バターン！と扉を開けられ、

かなり驚いた。

風「わッ！な、どうしたんですか！？」

急いで読んでいた本を後ろへ隠した。

いやだって…この本、見られたら私の人生終わりますよ…。

急いで平静を装って、駆けてきたチャマーとバルーンに話しかけた。

風「どうしたんです？そんなに急いで…。…あら！！」

その最後のほうでようやくバルーンが抱えている物に気づいたよう

だ。

風「あらあら…シークットさんどうしたんですか！？
…何やらかしたんですか？」

バルーン「ん～？なんか上から落ちてきた☆」

説明が少ない…、まさかシークットさん某有名映画のあの子だったとか…。
私の馬鹿！そんな事あるわけでは無いでしょう！
にしても…親方様上から落ちてきたって…。

チャマー「あ、ごめん。なんか梯子降りる途中で…。」
風「良いからここに寝かせてください。
よいしょ。」

とす、とシークットを寝かせた。

症状的には…、赤くなってますし、息が切れていますから…風邪…？
いえ、そんな筈は…。あ、多分…。

風「多分、熱中症か日射病ですね。
外で活動していましたか？」

チャマー「うん。殆ど外での活動だったからね…。」

そうですか…と、言った後。
水を良く絞ったタオルをシークットの額に置いた。

風「随分と急な運動を？」

そこまで深刻でないが…、夏の初めだ。
まだ涼しいとはいえ、侮れない。

チャマー「うーん……そこまででもないけど。
　でも一回いきなり倒れた…。」

やっぱろですかぁ…と、呟いた後、
シークットの額に手を当てて言った。

風「少し寝かせれば起きます。
　チャマーさん、水を持ってきてくれませんか？」

チャマー「分かった！」

トトッ、とチャマーは水をとりにいった。

風「梯子から落ちたのをキャッチしたのですか？」
バルーン「うん☆」

上機嫌に答える。
す…すごい。と内心尊敬をした。

バルーン「にしてもシークットって軽いね☆少し驚いちゃった☆」
…。
風「（前言撤回ですね。）」

にしても、と思い、目の前のシークットに目を落とした。
本当にどこの人なのでしょうか…。

ここら辺では珍しい不陰気ですし…、なんというか。
すっごく、私たちと違う感じが…。

バルーン「やっぱり、そう思うよね。」

風「！！…そうですね。」

ど、読心術取得済みですかこの人！？
あぁ…びっくりしました…；

バルーン「僕…調べてみたんだよ。こういう髪色とか、色白の
民族とか…。」
すこし真面目そうな瞳で彼は語った。

バルーン「…どこにも、居ないんだ。彼女とにた種族が。」

つづく？

火照る。（後書き）

ｏｒｚ

ごめんなさい。ごめんなさい。

で、では。

謎。（前書き）

タイトル…、思いつきません…；
では。

謎。

……え？

と、驚いたように聞き返した。

風「ラープさんには調べてもらったんですか？」

バルーン「うん。でも無かった。」

ラープは情報通でもあるからかなりのことは知っている。

でも、それでも分からなかった、という事は。

本当に存在していない確立が高い。

…か、かなりマイナーな部族なのだろうか…。

風「でも、絶対居ない、というワケでは無いんですよね？」

少し、視線をはずした後、うん。と返事をした。

……？私と似た、部族…？

火照って、ぼやける頭。

目はまだ開けないが、ぼうっと、二人の会話が耳に入った。

……。

まだ寝ていたほうが、知らないほうが幸せね…。

でもどうしても会話が気になる…。

…眠い…。

いきなり扉が開いて水を持ったチャマーが登場した。
チャマー「も、もって来たよ…。」
風「あ、はい。有難うございます。」
枕元に水を置いた。
バルーン「チャマーはもう戻ってて大丈夫だよ☆あと風も夕食の準備お願い☆。」
チャマー「えぇ～…でも…心配だし…。」
風「私も心配なんですけど…。」

そんな会話をしだして、ギルド長の権限であろうものを駆使して半ば強制にチャマーを出した。
ふぅ、と一つ可愛らしいため息をついた後に、
バルーン「起きてるんでしょ？聞いちゃった？」
ビクッ、とシークットの肩が震えた。
え…ばれてた…、いや、大丈夫だ問題ないはず…。
うん、は、はったりよ。きっと…、きっと…。
目、目、目を開けたら終了よ…。
お、落ち着いて…。

バルーン「あはは☆寝ているはずは多分無いと思ったんだけどな～☆」

こ…怖い怖い怖い怖い！勘弁してください見逃してください。
こ、これって目を開けるべきなの…？
お、怒ってるわけじゃないのよね…。

バルーン「なーんてね☆やっぱ寝てるのか。」

…ほっ…。た、助かった…。

バルーン「前からコレ気になってたんだよね～…。」

との言葉の後、頭のてっぺん辺り、つまりアホ毛が生息している部分が
妙に痛くなった。

シークット「ぃい…った！！！」

一気に目が覚めた。
ぱっ、とぼやけた天井が移ると同時に、悪戯っぽい笑みを浮かべたバルーンが見えた。

バルーン「あ、起きた。」

シークット「…つぅ…。」
まだ少しくらくらする…。
というか…今は痛みに悶絶することしか出来ない…。

バルーン「ごめんごめーん☆なんか何時も気になってたからさ☆」
シークット「…それは…私もだから…、いいよ。気にしないで…。」
というか、今はこの人のテンションに付き合えない…。
と、ぼうっとした頭で考える。
バルーン「話聞いちゃった？」
シークット「……いいえ。」
そう、答えたのは今は逃避していたいだけ…。
多分、時機に知るときが来るだろう…、嫌でも。
バルーン「そっか。何でもないよ☆…じゃあね。」
そう、言い残すとバルーンは医務室を出て行った。
シークット「今は…ねぇ…。」
ふわ…、とする意識の中で少し思考をめぐらせる。
…現実逃避、とか言うけれど。
一時的に心を癒せるのなら、と。
別のことに思考を巡らせた…。

つづく??

謎。（後書き）

色々可笑しい…ｏｒｚ
ごめんなさい。では。

疑問。

くらくら、とする頭。
なんか妙に頭が重い気がする。
仕方が無いので、まだ横になっている。
うだー…、としていると、ふと枕もとの水が目に入った。
シークット「（水…。）」
と、喉が水を欲しているシークットにとってはどんなに有難かったか。
少し喉に水を押し込む。実際にはないが、すっごく体にしみる気がした。
ぷっはーー…、と水を飲んだ後、少し頭も冴えてきた。
よし、もう大丈夫ね。いつまでもここに居るわけにはいけないわ…。
今日の夕飯…。
と、起き上がり、扉に手をかける。
そして掴もうとした瞬間にひとりでに扉が開いた。
そして開いてきたその扉を避ける術もなく、クリーンヒットし、床に倒れた。
風「あらあら！！だ、大丈夫ですか！？」
慌てて駆け寄ってくる風。

キマリア「キャーー！風何してるんですのーー！？」
＋キマリア。後ろにいたので、気づかなかった。

シークット「あれー？なんで二人とも…、夕食の準備じゃないの？」
いてて…と後頭部を抑えながら二人を見た。

風「さっさと終わらせてきました。」
キマリア「心配ですからね！」

シークット「…なんか、ごめん。」

何故かこんな所で罪悪感がわいてくる。
すると二人とも不思議そうな顔をした。

風「なんでそこで謝るんですか？」

……と、言われても。
自分の選択というか、性格というものだからどうしようもないと思う。
つくづく、ここら辺の人とは感覚のずれがあるのか、と思うシークットだったが、
やっぱり自分はここら辺の人ではないから感覚がずれているのだな、と改めて思った。

キマリア「人の親切はちゃんと受け取らなきゃだめですわよー！
謝られたらこっちまで悲しくなりますわーーー！」

と、大げさに嘆いてみるキマリア。

シークット「え…、ご、ごめん。」
ちょっと焦りながらシークットが謝るとまたまたキマリアの
オーバーリアクションが度をましてゆく。
あわわ…とかなり対応に困るシークット。
ため息をついてから風が二人の会話に入ってきた。
風「まぁ用は、人の親切にはありがとうと言え、と言いたいのです。
ですよね？キマリア。」
風の介入により少し落ち着きを取り戻したキマリア。
……まぁキマリアの言うことにも一理あるかな…。
と、考えながら。コップの水をまた飲んだ。

シークット「そうね…、ありがとう。二人とも。」

感謝の言葉と共にシークットは二人に笑顔を向けた。
、笑顔の数秒後いきなりキマリアに抱きつかれたシークットは、
かなり初めての現象に身を固めた。
キマリア「あぁもう素直で可愛いですわねーー！流石私の後輩ですわーー！！」
……あたりまえのスキンシップだろうが、
…私、初めてなんだけどな…。
助けを求めて風のほうを見上げると、こちらもまぁ…な状態だ。

風「キマリア…！私というものがいながら…！！」

…なんなんだこの人たち、と。

かなり考えてやっぱりここら辺では普通なのだろう、という認識にいたった。

キマリア「その発言は誤解を招きますから！！違いますわよ！！」

やはり、こればかりは普通ではなかったようだ。

ぱっ、とやっと開放された。

シークット「（……。）」

風「…ごほん、ごめんなさい。では本題に入りましょうか。」

やっと、真面目な話題のようだ。

何故か嫌な予感しかしないのだが…。

キマリアが話すようだ。すっごく真面目な顔をしている。

ごくり…と、生唾を飲み込んだ。

キマリアが口を開いた。

キマリア「貴女親方様とどういう関係ですの！？是非教えてほしいですわー！」

…これは、真面目な話題なのだろうか。

女子から見れば真面目なのだろう。が、いや、シリアスというのはとういうものではない。

風「キマリア…話題違いますよ…、でも私も気になります！」

と、話題が違うのに風も乗ってしまったようだ。
二人してシークットにつめよる。

だがしかし。
シークットは全くそういう感情を持ち合わせていない。
それにそれにたいする知識もない。

シークット「…？どういう関係ってどういう関係？」

疑問を疑問で返すシークット。
またコップに手を伸ばすが、もう中身はからなのに気がつき、やめた。

キマリア「どういう関係って…そういう関係ですわよー！」

かなり理解するのには難易度が下がった。
しかし全く理解できていない一名、シークットは首をかしげた。

風「じ…じれったい…！そういう関係というのは恋人とかですよ！！」

言うのは結構勇気が要ったのだろう。
そして目を輝かせながら二人はシークットの答えを待った。

シークット「……コイビトって、食べ物？」
その後に、コイキングみたいな？と付け足したのは気にしないでおこう。

その回答に二人はかなり落ち込んだ。

というか、もう力が抜けたようだ。へなぁ…となっている。
その様子をみて何かしてしまったのかと焦りだすシークット。

平和、だ。

……今は、ね？

青年の後を歩く、というか背後霊のようについてゆく存在が、ひとつ。
この青年がここに来てからずっとついてきている。
しかし、青年はその存在にも気づいていない。

夕暮れに染まりだす空。

その、背後霊のような存在は、空を見ながらなにやら独り言を。

＊「……お願い、来ないで。」

その声には、誰にも届かない。
そう。どれだけ霊感があろうが彼女の存在は見えない。

もう一言、

＊「ごめんね…＊＊＊。」

さらり、と風になびいて青年の髪が少し揺れた。

＊「……なんだ、ただの風か…。」

どこか懐かしい声を聞いた…気がした。

つづく？

疑問。（後書き）

謎多ｗｗｗｗｗ
も、もういいです。
でもこればかりはネタバレできないという事実…。
ごめんなさいｏｒｚでは！

ふわりとした。

時が動いている世界にやってきた。
私は、記憶。

アナタが忘れた、すべての記憶。

私は今かつてのアナタのパートナーと一緒にいる。
…気づかないけど。

彼、悲しそうだった。
アナタを守れなかった、って。

アナタは今何処にいるの？
羽は…何枚見つかったかな…？

あの羽はね、…ううん。なんでもない。

私は…、別にこういうのも別に良いと思うよ。
変…よね？私、変わり者だから…ね？

少女…否、存在は自虐的に微笑んだ。
ちらり、と青年を見た。

青年は草笛を吹いていた。
懐かしい音色は、綺麗な旋律を奏でて。
その姿がとても月に映えた。

……忘れてよかった記憶もあると思うの。

忘れるべき記憶が。

いや、忘れなくちゃいけない記憶…。

でもそうね…、もうすぐ、私は見えないだろうけど、あえるかもね…。

少女は、草笛に合わせて、何かを口ずさんだ。

…ッ…？

また…聞こえる…。

―ふわりとした存在は、姿を見せない。

でも、その破片を見つけてゆくんだ。

その破片は、都合の良い記憶を映しながら、

消える―

つづく？

コイビト。（前書き）

タイトルェ…。

コイビト。

わ…私何かしちゃったかな…。

シークットは目の前で脱力している二人を見て、少し焦った。
その原因が全く分からないシークットはただあたふたとしていた。

キマリア「……恐ろしい子…！」

風「と言いますか無知すぎます…。」

そう言い放つと、
風がすかさずコイビトとやらの説明を始めた。
鎮座して、おとなしくシークットは話を聞いた。

風「コイビトというのはですね…、つまり…その…。」

すっごく苦戦している様だ。
相当説明の難しいものなのだろうか…、と少し身構えた。

風「お互いに…好きみたいな感じです。つまりは、付き合っている？とか。」

なんとか本人は説明が終わった、と思っているのだろう。
だがしかし、そこまで甘くなかった。

シークット「ちょっと待って、好きって何？」

そう、質問した瞬間にガターンとこけるキマリアと風。

そ…そこまでだとは知りませんでしたわ…、と言われてしまった。
私…何か可笑しい…のかな…。

キマリア「えーとまず…親方様の事はどう思っていますか？」

そう、聞いてくるキマリア。
ほう？…と考え込んだ後にすぐに答えは出た。

シークット「普通に面白い親方だな…とか。あと、ちょっとミステリアスだな…と。」

何も表情を変えずにそういった。
瞬間に二人がかなり落ち込んだ。

風「あぁ～…違うんですか…。」

キマリア「スクープゲットだと思いましたのにぃ…。」

だいぶ調子が良くなったシークットは落ち込んだ彼女らをなだめている。
…と、その時扉が開いてバルーン達が出てきた。

な…ナイスタイミングすぎますわ…！
もう少し聞こうかと思いましたのに…。
そんなことは知らずにバルーンは普通に。

バルーン「もうすぐ夕食だよ♪シークットは大丈夫？」

あ、うん。大分良くなったわ。と返答してみた後、
…この人なら知ってるのかな…？と、質問をしようとしたが、

今はいいや、と口を閉ざして夕食へと向かった。

その後、夕食も入浴もやることは終了し、眠る時間になった。
部屋で就寝の準備を整えている二人には少し沈黙が流れている。
その沈黙を破ったのはシークットだった。

シークット「チャマー。」

準備をしながらチャマーはうん？と、返事を返した。

シークット「コイビトって、何？」

すると、かなり動揺したらしく
手に持っていた物を派手に落とした。

チャマー「え…？は…？…え？？？」

えぇ！！？？と、かなりオーバーなリアクションをとられた。

…き、記憶喪失…だからだよね…そうだよね…。
と、自分に言い聞かせていた。

シークット「ねぇ、何なの？それって…。」

本当に知らないんだね…、……ボクの口からは到底言えそうに無いよ…。

チャマー「よ…良く分からないな…、ば、バルーンに聞いてみたら分かるかもよ！
それかラープ。」

あの二人なら上手いこと説明できるだろう。
と、責任を二人におしつけた。…どっちかというとバルーンの方が教えてくれる率が
高いが。

シークット「…そう、分かった！」

そういう事なら…またあそこの場所に行けば居る…かな…？
そう考えるシークット。準備を終えて、電気を消す。

チャマー「おやすみ、シークット。」

シークット「おやすみ、チャマー。」

そう言うと、チャマーが完全に寝付くまで待った。
案外数分で寝息を立て始めるチャマー。
チャマーって寝つき良いわよねぇ…ちょっと羨ましいかも…。
と思いながら何時もの所へと向かった。

今日も、月がとても綺麗だ。
すぐちょっと歩くと草むらの中に小さな池がある。
バルーンだから違うところよね…、と探し始めたシークット。

だが、これが中々見つからない…。
仕方が無いので、芝生に座り月を見上げた。

シークット「居ないなぁ…。」
むぅ…と少し困ったような怒ったようなうめきをもらした。
仕方ないな…少し池の方に行こうかな…と、後ろを向いた。
するとそこには好都合、バルーンがいた。

シークット「あ、いた。」
やっと見つけた…、と安堵の息を漏らす。
バルーン「やぁ☆シークット、何か僕に用事？」
ニコニコと笑い横に腰掛けたバルーン。
今はフードを被っていない。
シークット「聞きたいことがあるんだけど…。」
バルーン「うん♪良いよ♪何かな？」
その返答を聞いた後に、口を開いた。
シークット「コイビトって、何？」
……。
バルーン「……え？」
聞こえなかったかな…ともう一度言った。
ちゃんと聞こえるようにはっきりと。

シークット「“コイビト”って…何なの？」

一瞬、本当に一瞬だけ戸惑った表情を見せた。

シークット「ご、ごめん、変なこと聞いた…？」

内心思いっきり変なことだよ…などと思っているのかは分からないが、

笑顔を崩さずに言った。

バルーン「ううん♪別に普通じゃないかな？」

シークット「良かった…。」

自然と笑顔になった。なぜならその質問をすると皆驚いて教えてくれないからだ。

ゆっくりと、バルーンが次の言葉を紡ぎだそうとした、が、途中でやめた。

すると笑顔で、

バルーン「大丈夫、その内分かるよ。」

そう言って笑った。

シークット「えー…、バルーンは知ってるの？」

バルーン「うん☆でも、どうしてもって言うなら教えてあげるけど？」

…ふわりと風が吹く。
どこからか、草笛の音が聞こえてきた。
まだ、知るのは早いかな。

シークット「うーん…自分で見つける！」

そう言うと、バルーンは笑って。
頑張って☆と言い、ラープに怒られちゃう、と部屋へと戻っていった。
その、バルーンの一瞬の表情が、……そこまで思いかけると、ふと、
何処からかその草笛に合わせているかのような歌声が、聞こえてきた。

シークット「…ッ…！また、聞こえる…。」

つづく？

コイビト。（後書き）

意味不明ごめんなさい；

もうすぐ発表だそうです。

「おおおぉぉ！！！！朝だぞおおおおおぉぉおおお！！！！」

ガンガンと頭に響く声と窓から差し込む日差し。朝、だ。

チャマー「お…おはよう…シークット。」

おはよう…と、回る頭で言った後に、朝会の場所へと行った。

いつもの様に、はりきっていこー！おー！の前にラープから遠征についての連絡があった。

ラープ「今日は遠征についての連絡がある。」

その瞬間、微妙に静かになる一同。

それを見て確認すると、次の言葉をつむいだ。

ラープ「明日、又は明後日に遠征のメンバーを発表する。」

そう言うラープ。すると、隣に居るチャマーが微妙に落ち込んでいる。

何やら選ばれるかが不安のようだ…。

ラープ「こらそこ！最後まで話は聞く！」

ちょっと怒られてビクッ、と直ぐにまたラープを見た。

ラープ「まだ選ばれるチャンスはあるから、各自頑張るように！」

そう言うと朝こうれいのはりきっていくよー！おー！を済ませ各自自分の持ち場へいった。
朝会場に残り少し会話をする二人。

チャマー「まだチャンスあるってよ！頑張ろう！」

そう無邪気に言うチャマー。
…そうよね、まだチャンスはあるわ、と。

シークット「…うん、頑張ろう！」

にこり、と少女は笑顔で返した。微妙に少年の胸が高鳴った。
笑い、二人は今日の依頼を受けに上の階へといった。

今日はおたずねもの掲示板。
二人はおたずねものの写真とにらめっこしていた。

チャマー「ねぇ今日は少し難しめにしてみない？」

そう提案してくるチャマー。ちょっと怖いが、成功すればその分御礼は弾むし、何より遠征メンバーにチャマーはなりたいらしい。

私も協力しよう。

シークット「うん、そうね。この人は？」

と言いながらおたずねものの写真を差し出す。
ランクはそこそこだが、チャマーが有利なように炎属性のを選んだ。
ちょっとチャマーは見た後笑って言う。

チャマー「そうだね、この人にしよう！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

……。

……。

…あ。

私は、確か…。

……そうだ、連絡しなければ。

つづく？

…沈黙と自分の（前書き）

実は別人目線。でも途中で戻ったり別人目線になったりを繰り返します。

…沈黙と自分の

……ここはどこなのだろうか。
やけに、暑い。

どうやら、無事に来れたようだ。

＊「…ッ…。」

ごろり、と仰向けになるとやけに眩しい光が目を襲った。
…太陽だ。直接太陽を目で見てはいけないと言われたため、
すぐに目を逸らし、起き上がる。

＊「……あれ。」

居ないな、と手元にある紙を見た。
“樹海の森のはずれの廃墟が集合場所”
…、とりあえず何処に落ちるか分からないから集合場所を決めたのだった。

だが、生憎地図がない。
用は道が分からない。

チッ、と舌打ちをした。
一刻を争うのに…。

すると、ふと仲良さげな二人が目に入った。

…丁度良く現れたので道を聞く事にした。

＊「すまない、道を尋ねたいのだが。」

自分でも思ったより大人びた声だった。
少し驚く。自分の身体年齢が上がっていた。時を越えた影響だろうか。
二人組みは少し驚いた顔をした後に直ぐに笑顔に戻り言う。

＊「うん、良いけど。」

青髪蒼目の少年が言う。

人の良さそうな人たち。
この時代だからな…、なんて思いながらも感謝を述べて、行きたい場所を述べた。

＊「樹海の森という所なんだが…。」

そこまで言うと、金髪（？）琥珀色（？）の目をした少女が言った。

＊「私達も丁度行こうとしてたのよ、奇遇だね！」

その瞬間に、姉を思い出した。
だが実際、目の前にいるのは少し幼さが抜けて、長髪、それに変なアホ毛が生えている。

流石に違うか…、と否定する。
若しくは、先祖だろうか？そんな事を思いながらも言った。

＊「礼を言う。」

二人は笑っていった。そんなことないよー、と。
不覚にもそんなに笑っていられることが羨ましくなる。
嫉妬なのだろうか…？後に笑う事も出来なくなると心で屁理屈を返した。

そんな事を考えているということも事知らずに、案内を始める。
というか、同行することになった。

つづく？

見知らぬ旅人、…記憶の片隅に。

…、森の道を歩きながらふと、思い返す。

あれ、名前聞いてなかったな…。

などと思いつつも、ま、良いや。などと思考を終了する。

森への依頼に向かう途中に突然声を掛けてきたこの女性。

何処かで、何か上手く言う事が出来ないけれど。

シークット「…どこかで…。」

ちょっとだけ呟いてみた。

まぁ小さめな声なので他の人に聞かれる事はなかった。

初夏の日差し。

ちょっと焼けそうな肌。

の、わりには日焼けをしない。

少し太陽の光でクラクラと沸騰しかけている頭。

それを上手く木が日差しをカバーしている。

ちょっと額に手を当てて日光を防いだ。

チャマー「シークット、大丈夫？」

心配そうに聞いてくるチャマー。

そういえば自分、この前倒れたんだっけ？

シークット「ん？大丈夫よ。後ろのお方は？」

そう少し話をふってみる。
全く話さないので、まさか途中でいなくなっていたりはしないだろうか？
まぁそれは流石に無いわけだ。
ぶっきらぼう、というか、静かな声だがどこか圧力のある声が返ってきた。

＊「…大丈夫だ。」

それだけ言うと黙る。
…深くフードを被っている彼女だが、微妙に苦しそうだ。
彼女もまた、熱に弱いのだろうか？と思いながらも返事を返す。
もう森に入る。
だが今の体調だと正直少し辛い。
顔には出さないが、吐き気と脳が沸騰するような感覚、少し揺らいだ視界に
苛まれていた。

シークット「…、ちょっと、休憩にしない？」

……珍しい、なぁ。とチャマーはちょっと心の中で言った。
結構珍しい事だ。彼女から休憩しようと言うのは。
流石に今日の日差しには耐えかねたのだろうか？

断る理由など勿論無いので、
チャマー「良いよ～。」
などと適当に返事をする。
もうすぐそこが森なのだが、今日は少しランクが高いし、まだ時間はあるから
良いかな。と考えながら場所を決めた。

休憩中。
木陰にて休憩している旅人とシークット。
近くに丁度あった小川で涼んでいるチャマー。

木陰に走る風が心地よく撫でていく。

シークット「っぷぁー…。」

と、へんぴな溜息のようなものを吐くと。
その時に今が丁度いいのでは？という考えが浮かんだ。

シークット「ねぇ、名前は…？」

隣の女性に話しかける。
ゆっくりとこちらを見つめる瞳は、どことなく光が無い。

＊「…ロザリア。あなたは？」

珍しく物を聞いてきた。
と、少し驚き同時に少し嬉しくなる。
ピ…ピ…、と鳥が鳴きながら飛んでゆく中、少女は名を名乗った。

シークット「…シークット。宜しく、ロザリア。」

その瞬間に、目の前のロザリアが酷く驚いた顔をした。
どうしたのだろう？と相手の心のうちを探る。
案外直ぐに答えは出てくるが…、
そんな事を考えていると。
ロザリアは何かを言った。

ロザリア「……さ…。」

ん？と小首を傾げた。
しかしそれ以上何も言わずに黙り込む。

…私の過去を、知っているのだろうか？

そう、考えて次の疑問に口を開いた。

つづく？

残酷な真相には隠蔽を。

次の疑問をしかけた時にふと、彼女のフードについている羽が目に入った。

シークット「…羽ついてるよ？」

そういうと、少し物思いにふけていた顔が現実へともどされた。

ロザリア「何処にだ？」

そう言いながらフードを触って探している。

が、全く違う場所だ。

可愛いところもあるのね、なんて思いながら。

シークット「取るからちょっと動かないでね。」

あぁ、との短い返事の後に、その真っ白な羽へと手を伸ばす。

…そういえば、前に羽に触ったときも変な記憶が…。

なんて事を思い出し微妙に躊躇もするが、ここは取ったほうが良いと、

その思考を優先し、羽に指が触れた。

シークット「よし…、取れた……。」

の、後にの激しい頭痛。

思いっきり声を出しそうになるが、頑張って最小限に抑える。
ちょっと収まってきたと同時に今度は視界が白くなってきた。
目の前が白くなってきた、と同時に何かの映像が見える。

“眠れないの？”　“うん。”
そう、眠れない少女にもう一人の少女は優しく笑いかける。
“じゃあ、何か絵本を読もうか。”

“うん！”

嬉しそうに、笑う少女につられて笑う少女。
その後に、眠れない少女は言う。

“ありがとう…”
ザザ…、とそこでノイズが走る。
名前を言っていたのだろうか？全く聞き取れなかった。
と同時にまた頭痛に襲われ、現実へと戻った。

現実へと戻ると、心配そうに目の前の彼女、ロザリアが顔を覗き込んでいた。

ロザリア「…大丈夫か？」

その顔は、まるで記憶の片隅に残った誰かのようで。
まさか自分はこの人にあったことがあるのではないのか…？
なんて。

シークット「あのさ。」

何だ？というように見つめてくる彼女の瞳はどこかやはり懐かしい。
はぁ？と言われるのを覚悟して、質問をしてみる。

シークット「私達、さ、何処かで会った事、無い？」

その瞬間に、名前を聞いたとき以上に彼女の顔が驚いたと思う。
次には彼女は手をこちらへと向けていて、その手には仕込み刀があった。
だが、どうしてか、動じもしないシークットは、彼女に言った。

シークット「無いかな？凄く前のような、でも…、凄く、先の事の様な。」

凄く先、とは可笑しいのは自分で承知だ。
だが…何故かそんな気がしてならない。

静まり返った森。
ただただ、陽は地を焦がして、木漏れ日は私達をうつしていた。
動じもしない彼女に、少し恐れを覚えたのだろうか、刀が下がる。
少女の口はこう言っていた。

ロザリア「……私の、敵だ。」

それだけ言うと、森へと消えていった。
不思議と止める事はしなかったし、出来なかった。

日陰から出て照らされた彼女の背中は、ただ何かを背負っていた感じがしていた。

シークット「…そっか。敵、か。」

でもそうなると何故先ほど自分を殺さなかったのか、と。
疑問は募るばかりだった。

ただただ空は青く、今日も、吸い込まれそうなほど、碧かった。

つづく？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3902t/

ポケモン不思議のダンジョン時の探検隊～トキタンズ　～

2011年11月23日16時46分発行